
離縁します！

おこた

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離縁します！

【Nコード】

N1908X

【作者名】

おこた

【あらすじ】

離縁を決意した私。これからやるべきことは、慰謝料の計算でも、夜逃げをする算段でもない。次に奥さまになる人のため、夫を躰なおすこと！ ちょっと思考がぶっ飛んだわけあり奥さまと、他人の存在を意識しない無い無い尽くしな旦那さま（離縁真近）の物語。

R15は念のためです。

1 離縁を決意しました。（前書き）

なろう様への小説投稿一周年記念、自分企画！

作者の短編集「50音」物語の種たち」へ投稿するつもりだった
作品の長編です。

楽しんでいただけると嬉しいです。

おこた

1 離縁を決意しました。

突然ですが、私、離縁を決意しました。

まだ結婚して一年足らずですが、少なくとも季節は一巡りしているので、まあ、良い方でしょう。私の友人は季節が変わる前に離縁していましたから。うん、もった方です。

別に夫が浮気したとか、暴力を振るったとか、借金まみれになったとかそういう深刻な問題で離縁を決めたわけではないですよ？ただ、そうするしかない状況になってしまったというだけなんです。

3ヶ月後のリーフェリア祭までに、なんとしてでも離縁します。

あ、リーフェリア祭というのは、この国で年に一度、国と神殿が総力を挙げて執り行う盛大なお祭りです。小さな村や集落でも、この日ばかりはお祭り一色に染まるのだとか。私の目標は、このお祭りが開催される前に、きれいさっぱり後腐れなく離縁することです。

離縁を決意した夜はちょうど夫が居なかったので、一晩寝ないで考えました。

夫と離縁するために必要なこと、離縁した後に必要なものは何か。その為に、なにをすべきか。

そういえば、結婚するときはすべて夫と保護者によって整えられましたので、どうすれば離縁できるのか、手続きがどうなっているのか、全く知りません。

まあ、私には離縁経験者の友人が居ますから、懇切丁寧に教えて

くれることでしょう。嬉々として全て取り仕切ってくれそうな気がします。離婚のために必要なことは、全部友人に任せてしまつて大丈夫でしょう。

次は離婚した後に必要なものですね。

私は考えました。頭が痛くなりそうなほど、考えました。

結果、朝日を迎えながら、私は決意しました。

次に夫の妻になる方のために、私は夫を賤し直します！

何をどう考えたらそういう結論が出るんだ、なんて言わないでくださいね。徹夜明けの頭が正常に回っているわけが無いんですから。しかも、そこで思い付いた考えは何よりも素晴らしいものを感じてしまうんですよ、後で正氣に戻ったらひどく後悔するつてわかっているというのに。

そしてさらに質が悪いことに、私は一度決めたことはなにがなんでもやり通す頑固さを持っていました。

夫をどこに出しても恥ずかしくない素晴らしい夫にして、未来の奥さまに満足していただけるよう、しっかり賤してみせましょう！！

こうして、徹夜明けの変なノリで『現妻による、未来の妻のための、夫の再教育計画』が始まつたのでした。

・・・とりあえず、寝ましょう。

1 離縁を決意しました。（後書き）

見切り発車で始まった新連載です。

今月中に終わるのが目標なのですが
とある方が予想外の方へ動いてしまって、
どうなることやら・・・。

気長にがんばりますので、

気長に楽しんでいただけると嬉しいです。

おこた

2 こんな夫です。

私の夫は、見事なまでに無い無い尽くしな方です。

夫となる方として初めて紹介を受けてお会いした時は、クマさんだ、と思いました。

子供の頃に我が家にいた、私の身長よりも大きくて、私を含めた兄弟たちにソファの様に扱われていた焦げ茶色のクマさんのぬいぐるみにそっくりだったんです。背が高くて、がっしりしていて、焦げ茶色の髪とひげ、瞳も良く似ていました。

残念ながら、我が家のクマさんの方が表情と愛嬌がありました。が、とっても優しい顔をしていたんですよ、ぬいぐるみのクマさんは。

夫になるかもしれない相手は、それはそれは無表情に、無愛想に私を見下ろしていました。現在では、そこからさらに、無口、無骨、無精、無感動、無視とさらなる「無」が増殖して行くわけですが、当時はまだそれを知りませんでしたから、たったそれだけの「無」でも少し悲しかった気がします。

大好きなクマさんにそっくりな方から嫌われてしまったと思ったんです。

夫になるかもしれない方、激しく存在感を主張する筋骨逞しい大柄の体を持ちながら、気配を余り感じさせない身のこなしを持つ人でした。

何か運動をしているのかもしれませんが。自然にこんな筋肉がつく

とは思えないですし。足音だつてたてません。

ただ自分の格好に無頓着なのか、その辺のものを適当にまとっただけ、という感じの味気ない服装でした。

私のほうは、保護者の方にわざわざこの日のためにと服を新調していたでいていましたので一人だけ気合が入った余所行きで、いたたまれません・・・。

夫になる人として紹介されたのは何かの間違いだったらしいその方は、私のことも全く興味が無いようで、無関心なのを隠そうともせずに早くこの場が終わればいいのに、と時間の経過だけを待っているような様子でした。

私としても、この方と夫婦になるのは想像できないなあ、と緊張も何もまるっとなくなってしまうて、ついボンヤリしてしまっていたようです。

保護者の方に促されてようやく意識が戻って来ました。

腰を上げた保護者について行こうとしたところ、とてもいい笑顔で止められました。

「今日から君は彼の家で暮らしなさい」

爆弾発言でした。

私だけでなくモロに被爆してしまった、今日から一緒に暮らす事になった相手は、眼を少しまるくしていただけで、反論も主張もなく、私を連れ帰ったのでした。

あれよあれよと整えられて、数日後には正式な夫婦になりました。書類上、ですが。

え、夜の営みですか？

初夜はもちろん、その後も一度もありません。何故か寢所は一緒なんですけどね。ほんと、なんなんでしょう。

とにかく、こうして私は無い無い尽くしな夫を持ったのですが、それは結婚してから変わらず、最近に至っては、夫から話しかけられるどころか、声を掛けられることさえなくなってしまっています。

・・・本当にただけ無い無い尽くしなんですか。

3 こんな妻です。

私の一日は、夫を起こすことから始まります。

実はこれが結構、命がけ。

私と夫は壁に接した寝床で一緒に寝ているんですが、私は常に壁側で、夫は外側。

二人で寝るとちょっと小さめの寝床ですので、私が起きて移動するには、夫を乗り越えて行かなきゃいけないんですが、全身筋肉の鎧で完全武装している夫が寝ばけると、非常に危険なんです。

貞操の危機とか、きゃーっ、って感じの内容の意味での危険じゃないですよ？

一度、首を絞められて気絶したことがあります。

すぐにちゃんと目を覚ました夫によって活を入れてもらって事なきを得ましたが、あの時は本当に夫と一緒に寝るのはやめようと思いました。

実際、物置部屋を片付けて私一人が眠れるスペースを確保して寝床を用意するところまで半日でやりました。

ただ、あまりにも隙間風と雨漏りがひどくて使えませんでした。そういえば、夫に修理をお願いしていたのに、まだやっていませんね。後でせつつかなくては。

そういうわけで、寝ぼける夫を刺激しないように驚かさないように、そっと、そっと、声をかけつつ揺さぶるわけです。

寝起きの夫にうつかり殺されたくないですからね！

うまい具合に夫が目を覚ましてくれたら、足をよけて私が通れるだけの隙間を空けてくれます。そこを通って寢床から降り、物置部屋で服を着替えて冬ならまず暖炉に火を入れ、夏ならまず外に水を撒きにいきます。

簡単な朝食の用意をして、夫が起きてきたら一緒に食べるのですが、私が食べ終わる頃には夫は出かけています。私と夫の一口の大きさにはだいぶ差があるようですね。

夫が居ない間に部屋の掃除や庭の手入れ、ちよつとした裁縫などをこなしつつ、昼食の時間になると、夫がふらりと帰ってきて、一緒に食べます。私が食べ終わる頃には夫は再び出かけています。

夫が居ない間に夕食の準備と明日の朝食の準備をして、洗濯をしたり、家の周りを散歩したり、本を読んだり。夕食の時間になると、食料や日用雑貨などを持って、夫が帰ってきます。本当は私が買い物に出かけたいのですが、夫は絶対に行かせてくれません。じゃあ、せめて一緒に行かせてくれとせがんでも、夫は首を横に振るだけ。

どうやら夫は私をあまり街に出したくないようです。

まあ、親しい友人は訪ねてきてくれますし、月に1、2度はどうしたって街に出なきゃいけないので、その辺はあまりきにしていないですけどね。

夕食と一緒に食べて、私が食べ終わる頃がちょうど夫の晩酌が終わる頃。食器をまとめて片付けて洗えるので、助かります。後は読みかけの本を読んだり、編み物をしたり。お風呂の準備をして入って、寢床の奥側にもぐりこんだら、おやすみなさい。

これが私の一日です。

・・・夫と交わした言葉は、片手で足りる量でした。

4 夫を躑直します。挨拶をさせましょう。

このままじゃだめです！

なにがだめって、次に奥さまになる方との会話が片手で数えられるくらいしかないってありえませんか！

そこで私は考えました。

夫との会話が片手で足りてしまうのは、そもそも、挨拶をしないのが原因だと思うのです。本来、挨拶だけでも片手以上の会話が成り立つはずですから。

誤解を招かないように言わせていただきますが、私はちゃんと挨拶していますよ？

ただ、夫から帰ってくるのが、頷きだけなので、会話になっていないんです。

反応を示してくれるだけ、ましかなあ、と思っていたのですが、これからはそうはいきません！

挨拶は人づきあいの基本中の基本。とっても大事なものです。

次に奥さまになる方に、挨拶もできない夫かよ、と思わせないためにも、なんとしてもこれは躑なければなりません！

というわけで、さっそく今朝から躑開始です！

寢床の奥から慎重に夫の腕に触れます。

しつこいようですが、この時、いきなりつかんだりしちゃダメです。危険です。寝ぼけた夫の攻撃対象になるような、激しい動きは一切禁止です。あくまで、そっと、そっと触れるのが正解です。

ちなみに昔、寝ぼけた夫に落とされたのは、いきなり腕を揺らしたのが原因でした。

腕に触れて、とくに反応がなければ、そのままゆっくり動かしません。

「旦那さまー、起きてください。朝ですよー」

最初は小さな声で、それから少しずつ大きくしていく。これも重要です。いきなり大きな音で驚かせてしまうと、びっくりした野生動物（夫）に反射的に抹殺されてしまうかもしれませんから。

いえ、やられたことはないですよ？

さすがにそれを経験していたら、今私ここじゃなくて土の中です。

そうやってしばらく声をかけていると、夫の目が開きました。

眠っている時の夫はそれこそクマさんのぬいぐるみのように気持ちよさそうに眠っていてかわいらしいのですが、いかんせん、目を覚ました途端に無表情になってしまいます。

惜しいですね。いつそ寝ぼけたままでいてくれたら、かわいいのに、と思いかけてやめました。

夫が寝ぼけたままでいたら、私の命がいくつあっても足りません。却下します。

「おはようございます、旦那さま」

さあ、ここからが躰開始です。

夫はいつもの通り頷くと、足をちょっと曲げて、私が通れるだけの隙間を開けてくれます。

隙間を通って、寝床から降りると、もう一度夫の腕に触れて注意

を促します。

また閉じようとしていた目が、再び開かれ、ちよつと不思議そうに私を見ています。

「旦那さま、おはようございます」

もう一回、旦那さまの目を見てご挨拶。旦那さまはまたちよつと頷きますが、これで納得しては、未来の奥さまとの会話がある夫婦生活の夢が断たれますから、私、もうひと頑張りしますよ。

「おーはーようございます」

ちゃんと聞こえるように少し近づいてもう一度繰り返します。ここまでやったら、ちゃんと声を出して返事をしろ、と言っているも同じでしょう。

さあ、どうする、と用心深く夫を見つめていると、夫は二度、ゆつくりと瞬きをしたかと思うと、そのまま目を閉じてしまいました。

えええっ！？ また寝るの！？

あ、そういえば夫は朝に弱いんでしたっけ。私が着替えて、家のことをして、朝食の用意ができた頃でないと起きて来ませんから、いつも二度寝していますしね。でも、でもですよ、この状態で寝ることはないんじゃないでしょうか？

「おはよーございます、おはようございます、ですよ、旦那さまってばー！」

ここで負けるわけにはいきません！ 一度目を覚ました旦那さまは私の命にかかわるような寝ばけ方はしないはずなので、ここは思い切って腕をゆすって、しつこいくらいに繰り返し返します。

おっ、旦那さまがうつすらと目を開けました。
眠そうな半眼状態は、普通はかわいいものなのかもしれませんが、
旦那さまの場合は何やら背筋が寒くなるような気がするのはどうし
てでしょう？

「お、おはよー、ございます?」

思わず腰が引けちゃうのは、しょうがないんです、うん、仕方な
い。

仕方ないんですけど、その動きは失敗でした。
狩猟動物の前で、逃げるような動きをしちゃダメでした。本能的
に追いかけたくなるっていいですよ、そういえば。
薄目の状態のまま、寝ぼけているとは思えないような素早い動き
で捕獲され、抱き込まれてしまいました。

お、重っ！

窒息する、圧死する！

じたばた暴れていると、旦那さまが上に乗った状態から、体
を少しずつしてくれました。

呼吸万歳。

大きく息を吸い込み軽くせき込むと、その様子を旦那さまの半眼
が見つめています。

なんでしょう、どうも生命の危機が去っていないように感じます。
。。。

「えっと、おはよーございます?」

とりあえず、沈黙してこのまま睡眠に入られてしまっても困るの

で、もう一度声をかけてみました。

まだどこか寝ぼけた雰囲気の方は、何かを考えている様子。なんだか非常に嫌な予感がしました。

が、私が動くよりも先に夫が無表情のまま、顔を近づけて来て。

ちゅ。

かわいらしい音をたてて頬に唇を押し当てる感触。呆然としている間に、反対側の頬にも。

ちゅ。

反応を観察する目とぶつかって、自分の顔が一気に熱くなるのを感じました。

だ、誰がちゅーしろなんて言いましたか！？

私はただ、声に出して挨拶をして欲しかっただけで、ちゅーして欲しいなんて一言も言っていないです！！

ああつ、でも挨拶して欲しいってはっきり言ってなかったです、そう言えば。

誤解されるようなことをしたつもりは無かったです、空気を読まない無い無い尽くしな夫なんですから、ここは私の作戦ミスということでしょうか。

真っ赤になっているであろう顔のままそつと夫の様子を伺うと、なんの感情も浮かべていない目で私を見ておりました。

なんだか自分だけわたわたりしているみたいで、恥ずかしいし、居た堪れないんですが。とにかく寢床から起きようとすると、夫の腕

一本で押さえられました。

なんででしょうか？

なんでこちらをじっと見ているのでしょうか。

なんで自分の頬を指で叩いているのでしょうか。

・・・これ、なんの羞恥刑ですか？

5 夫を躰直します。お話をさせましょう。？

結局。

夫に挨拶をさせることは出来ました。なんの感情もこもっていない、爽やかさからは程遠い低い声での挨拶でしたが、良しとしましょう。

やったぞ自分！！ とりあえず朝の挨拶は達成した！！

身を削るような状態でしたが。

それにしても、朝の挨拶だけでこんな目に遭うなんて、前途多難にもほどがあります。接触は極力避けましょう。どう考えても私の寿命が先に磨り減ってなくなります。

うん、そうしましょう。夫は喋らないだけで、こちらの言うている事は聞いているようですし、ちゃんと言葉に出してお願いすれば大丈夫なはずです。ええ、きっと大丈夫です。

・・・だから、どうしてちゅーと朝の挨拶がひとまとめになるんですか！？

いえ、朝の挨拶のことはもういいです・・・。

考えてみれば、これは未来の奥さまとのスキンシップが増えるということなわけですから、良いことに違いありません。

ええ、たとえ毎朝羞恥心で死ねるっ！ と天国と地獄からのお迎えが見えるような気がしたとしても、きっと気のせいなはずです。

朝の挨拶には予定外の副産物がついてきてしまいました。10日ほどかけてじっくり寝たおかげか、食事の時や出かける時と帰ってきたとき（ここでも一悶着ありました。私は毅然と立ち向かいましたとも！）そして寝る前の挨拶はしてくれるようになります。

ほら、これだけで片手を超える会話が成立しています。
やったぞ、私！

次は食事ですね。

夫は三食必ずうちで食べるのですが、感想を貰ったことがあります。せめて不味いとか、嫌いなものとかを教えてくださいませんか？ いぶん前から聞いているのですが、無視されています。

いつも綺麗に平らげてくれるので、好き嫌いは無いのかも知れませんが、量が足りているのかどうかさえ分からないのは妻としては気になることです。

ここは未来の奥さまのためにも、一度はつきりさせるべきでしょう。

ついでに、食事の時にちよつとでも会話がはずめば、無い無い尽くしから脱却できます！ 俄然やる気が出ました！

まずは、朝ご飯です。

朝はいつも簡単で、夕べのスープの残りとお芋を湯がいて潰して、お庭の野菜を混ぜたサラダとパン。以上です。

はい、手抜き料理ですが何か？ って正直、毎日こんな手抜き料理な訳で、ここで感想を聞くのってもしかして自滅路線まっしぐらな気がしないでもないのですが、背に腹は代えられません！

いざ、勝負！

「旦那さま、今日の朝ご飯の量はどつてでしょうか!？」

妻の攻撃! 首を振るだけでは答えられない質問を投げかけた!

夫の反撃! 夫は頷いた!

・・・沈黙。

「あ、あのつ、もう少し違ったものも作りたいなあって思っんです
が、どんなものが食べたいですか!？」

妻の再攻撃! 首を振つても意味が分からない質問を投げかけた!

夫の反撃! 首を傾げた!

沈黙。

あ、あの!。

・・・会話、しましょうよ?

夫を躰直します。お話をさせましょう。？

会話って言葉を投げかけて、それに対して言葉を投げ返し、いかに楽しむかっていうある意味知的な運動だと思うんですよね。

それをこっちが全力で投げかけた言葉を吸収して受け止めて終わってしまうと、こちらとしては、投げ続けるしか手段がなくなってしまう。

しかも相手の懐の深さと言ったら底なし沼級に深く、弾き返してくることにすら無いとなると、息切れを起こしていさぎよく諦めたくなってきました。

まあ、夫は喋らないだけでこちらの話を聞こうとする姿勢はありますので、まだ救いがありますが。これで聞いてさえ貰えなかったらさすがの私も匙を投げていたことでしょう。

数日、食事の際にこの不毛で一方的な全力投球を続けていたのですが、今日はもっと直球で勝負してみたいと思います。

勝負の時は、夕食後のひととき。

もし惨敗してもすぐにふて寝出来る素晴らしい時間帯です。これぞ計画的犯行！ 惨敗を予測して逃げ道を作っておく辺りが私らしいです。

さあ、夫がゆっくりと晩酌しているところを急襲します！

「旦那さまはどうしてあまりしゃべらないのですか！？」

超直球勝負！！

さあ、どう出る！？

首を傾げるか、無言で流すか、無反応で無視するか。

夫は無表情のまま、お酒を一口飲むとじつとこちらを見つめてきます。これは無反応で無視する方向ですね！？　そうはさせません！

「話をしないと、お互いに分からないことが沢山あって、誤解とかすれ違いとかが起きてしまうと思うんです！　だから、お話しませんか！？」

夫は多分外でも無口な人だと思うので、このままでは近所付き合いもままならなくなってしまう可能性があります。多分、夫の知っている街角情報よりも、私が友人から仕入れているものの方が多いに違いありません。

情報って大事ですよ。知らないで危険にさらされていることだつてあるんです。滅多にない素晴らしい機会だつて知らなかったらあつという間に通り過ぎてしまいます。情報交換の基本は会話ですから、夫にはもっと会話に積極的になってもらいたいです。

もちろん夫婦仲にも著しく影響しますから、次なる奥様のためにも会話には慣れていただきたいところ。

固唾を飲んで夫の反応を伺って、少し驚きました。

夫が少し複雑そうな表情をしています。無表情が基本の夫の表情筋が活動している！　珍しい！

「・・・何を誤解しているの？」

夫がしゃべった！！

あの無い無い尽くしの夫がしゃべりました！　しかも、会話らしい会話を投げ返してきてくれたのです！！

私は感動で思わず夫を凝視してしまいました。

挨拶以外で言葉を交わすのっていつぐらいぶりでしょうか！？

少なくとも三月以上前なのは間違いありません。ゆっくりとした低音の声に多少不機嫌さがあつたとしても、この感動には代え難く・
・って、あれ？ え？ 不機嫌？

さらに驚いて夫の顔を見つめると、眉間にシワが寄って、とても不機嫌そうです。

こんなに不機嫌そうな顔は、初めて見ました。夫の基本は無表情で、時々感情がチラツと横切る程度ですから、こんなにはつきりと感情を表に出すことはこれまでありませんでした。

良いことだと思うのですが、クマさんみたいな夫が不機嫌な顔を見ると、こんなに怖いものなんです。これならいつもの無表情のままできて欲しかったかも、なんて思ってしまった私はまだ覚悟が足りません。

いけない、脱線してしまいました。

今の話題は誤解、誤解についてでした。今している誤解と言え
ば。

「えーと、例えばですけど、私、奥側で寝なくても寢床から落ちたりしませんから、旦那さまは奥側で寝ていいんです。奥側の方が好きですよね？」

とつさに思いついたのは、これでした。

夫はいつも必ず私を寢床の奥側に寝かせるのですが、どうやら私を外側にすると、寝ている間に落っこちると思っているようです。一緒に暮らすようになってから、そんな失敗はしていないはず

ですし、最初の頃は普通に外側で寝ていたような気がします。保護者が密告したのでしょうか？ でも保護者のところでも寝床から落ちるなんて、一度しかやっていないのですが。

それに、夫はいつも私が起きた後の短い時間で二度寝をしているようなのですが、そのとき寝室をのぞくと、いつも私が居た奥側で寝ているんですね。ということは、やっぱり奥の方が好きってことですよね？

私は寝床から落ちたりしませんし、どちら側でも気にしません。

勢い込んで言うと、夫はもう不機嫌な顔はしていませんでした。ただ、最近よく見るようになったちよつと驚いたような表情を浮かべて片手で顔を押さえるとうつぶむいてしまいました。

・・・どうしたんでしょうか？

夫を躰直します。お話をさせましょう？

夫はしばらく片手で顔を押さえてうつむいていましたが、ややあつて深いため息をつきました。

「・・・誤解、だな」

呻くようにつぶやいた夫に勢いよく頷いてみせます。
ついに会話が成立し、かつ継続しました！ やったっ！ 快拳です！！

「そうなんです、誤解なんです！ だからもつとお話しましょう！
あ、私今夜から外側で寝ますね！」

会話が成り立ったのが嬉しくて興奮気味で言うと、夫が片手の隙間からチラツと視線を投げてきました。

な、なんででしょう？ 夫がひどく疲れているように見えますし、なんとなくその視線に物騒なものが含まれているような気がするの
は、気のせい、ですよね？

「このままでいい」

私に遠慮しているんでしょうか？

夫の視線にちよつとビビりつつも、せっかく話をしようとしてくれているのですから、この機会を逃すわけにはいきません。

会話続行です。

「私、本当にどちら側でも眠れますよ？ お好きな位置があるなら、そちらで休んだ方がよく眠れていると思うんですが」

筋金入りの快眠体質なので、寢床が変わろうが枕がなかるうが、私の睡眠欲を妨げる要素にはなり得ません。というか、椅子の上でも快眠出来ますし。

「このままでいい」

もう一度、本当にこのままでいいんだという明確な意思を込めて夫が言いました。これ以上無理に勧めるのも迷惑かもしれませんね。私は、わかりました、と言葉では従順に答えつつ、今夜は夫が先に寢床に入るのを待ってみようと思います。そうしたら、私の方が外側になるはずですね！

ささやかな企みを練っていると、夫が小さくため息をつきました。

「どうしました？」

「誤解が解けたら、どうなる？」

誤解が解けたら、ですか？ 珍しく夫からさらに会話を続けようとしてくれているのが嬉しくて舞い上がってしまいそうになります。が、私の鋼の理性で押さえつけて考えます。

えーっと、誤解が解けたら、私は外側で寝て、夫は内側で眠るってことですね。するとどうなるかというと。

「よく眠れるようになると思います！」

これ以外、正解はないでしょう、と自信満々で答えると、な、なんと！ 夫がふっ、と口元に笑みを浮かべました。

お、夫が、笑った！

あの無表情、無感動、無関心の夫が、笑いました！

ああ、私、今日という日を一生忘れません！ 出会ってから初めて、夫が笑ったところを見ました。

そうか、クマさんにそっくりだと常々思っていたんですが、ちょっと唇の両端が上に上がると本当にそっくりになるんですね。このまま抱きついて、ソファ代わりにしたい欲求が湧き上がってきます。

やっちゃってもいいですか？ いいですかね！？

ああでも、せっかく夫が会話をしてくれて笑顔も見せてくれたのに、奇行に走ってまた無い無い尽くしに戻ってしまったら、非常にもったいないです。うん、ここは我慢、我慢。

両手をこっそりわきわき動かしながらも、理性が打ち勝ちました。よくやった、自分！

夫の珍しい笑みが消えるまでの一瞬で、ここまで考えました。一瞬って結構長いものだったんですね。

笑みが消えた夫の口元を残念な思いで見つめていると、突き刺さるような鋭い視線を感じました。

驚いて口元から視線をあげると、一瞬、夫の瞳に、うねるような熱っぽい何かが見えた気がしたのですが、瞬き一つで、いつもの無関心な風いだ瞳になっていました。

・・・な、なんだったんでしょう、今の。

夫の笑みを見た勢いで幻覚まで見てしまったのかもしれませんが。はしやぎすぎですね、自分。

でも、今夜は大成功です。

夫と会話ができた上に、笑顔まで！ 今日には勝利の美酒に酔いた

い気分です！

いつもは手酌で飲んでいる夫にお酌して、食後でも食べれるような簡単なつまみを作って、私も一緒に飲ませていただきました。もっとも、私が飲むのはお茶ですけどね。

さらに小さなたくらみも成功させるべく、その夜は頑張つて遅くまで起きていたんですが、いつの間に眠っていたのか、目が覚めたらいつも通り寢床の奥側で横になっていました。その後も何とか手前側に寝るべく起きていようとするのですが、いつも私が先に寝てしまいます。

・・・そういえば、いったい夫はいつ寝ているんでしょうか？

6 夫を躰直します。早寝をさせましょう。

一度気になりだすと、どうしても気になってしまふものですよね。夫はいつたいいつ寝ているんでしょうか？

というわけで、私は連日夫の様子を観察しています。

晩御飯を食べて、晩酌して。

お風呂に入った後は、本を読んでいたたり、何か書き物をしていたり、用途不明の道具の手入れをしていたり、時々ふらつと外へ出てみたりしているようです。

夜もだいぶ更けているというのに、寝ようとする気配がありません。

今夜という今夜は夫が寝るまで絶対に寝ないぞ！ という気構えでいたのですが、快眠人間の私は、反面、眠気に非常に弱いという一面も持ち合わせていました。

別に我慢できないわけではないのですが、睡眠欲を満足させられないと欲求不満がたまってくるというか、なんというか、要するに、機嫌が悪くなってしまうのです。

普段は気にならないようなことにもむっとしてしまったり、感情の起伏が激しくなったり泣きたくなったり、笑いたくなったり。自分でもよくない弱点だと思っているのですが、寝てさえいれば弱点が顔を出すこともないので、すっかり忘れていました。

夫を奥側で寝かせるという使命に燃えて始めたはずが、いつの間にか意地になっていたのかもしれない。朝はいつも通りの時間に

起きていますので、連日の睡眠不足が蓄積されていつて、ついにその夜、爆発してしまいました。

もう我慢できません。

『夜更かし夫の早寝計画』、発動です！

夫はいつもの通り、何に使うのか謎の道具の手入れをしたあと、何が書かれているのか謎の本を読んでいた。夫の本は異国の言葉で書かれているものが多く、せっかく本棚に本が並んでいるのに、私には全く読めません。そのことも不満を募らせる要因になったのかもしれないのですが、私はそれまでちくちく縫っていた小物を置いて、夫が座るソファに腰掛けました。

「旦那さま」

呼びかけても、本から視線は外れません。なんか、むかつきます。

「旦那さまっ」

ちょっと強めの口調で呼んでも、全く動じません。なんですか、この泰然自若っぷり。というか、呼びかけているんだから、せめて返事くらいしましょうよ。最近は会話が成り立つようになってきたので、無視されると余計に痛いです。

「だーんーなーさーまっ！」

本を持つ腕に手をかけてゆさゆさ揺さぶりながら呼ぶと、ようやくこちらに意識を向けてくれました。

「寝ないんですか？」

油断するとまた本に視線が行きそうになるので、身を乗り出すようにしてその視線の先を邪魔しました。何しろ、ものすごく眠い。でも夫を先に眠らせた。とにかく眠い。

せめぎ合う欲求の板挟み状態になってしまっていて、私もかなりおかしい状況になっていました。

夫が読みかけの本を軽く持ち上げて、本を読んだから、というようにな動作をしました。長い事会話のない生活を送っていたせいか、こういった動作から夫の言いたいことをくみ取るのには自信があります。

・・・今開いてるのって、半分も行っていないですよ？ いたい、いつ寝る気なんですか。

「ダメです。寝ましょう」

夫から本を没収しようと手を伸ばすと、ひょい、と逃げられました。むかつ。私から逃げるとは、いい度胸です。さらに反対の手を伸ばすと、今度はちょうど届かない頭上へ。思わず膝立ちになって夫の肩に手をかけて伸びあがると、いきなり夫が立ち上がりました。

落ちるっ！？

衝撃を覚悟して目をつぶりましたが、全然痛くなりません。そつと目を開けると、私を抱えたままの夫が寝室のドアを開けるところでした。そのまま寝床の奥側まで運ばれ、寝具をかけられます。ああ、やっと寝れる・・・って、そうじゃないでしょ、私！？

「ダメです。旦那さまが先に寝るんです」
「なぜ」

何度も言っていますが、このときの私は眠気でおかしくなっていたんだと思います。

夫が会話をしてくれたのを嬉しく思いながらも、寝ようとしないうちに腹を立ててしまいました。寝具の隙間から手を伸ばして夫の服を握り、力任せに引つ張りましたが夫の体はびくともしません。もうっ、眠いのに！

「旦那さまが奥側です、旦那さまが寝るところを見るんです」
「・・・わかった」

ため息のような返答があつてすぐに夫が寝具ごと私を外側に移動させると、奥側に横になつて目を閉じました。寝具を独占しているわけにもいかないのです、半分夫にかけてあげると、規則正しい寝息が聞こえてきます。

なんだ、やっぱり夫も眠かったんですね。

夫が奥で先に寝たことに満足して、私も目を閉じました。

それにしても、夫と会話が成り立つようになってから、どうも私はワガママになつてきているのかも知れません。今夜のは完全に八つ当たりですよ。反省です。

でも、未来の奥様とのことを考えてみればこれも良い経験になったかも知れません。それに妻の癪癢にも冷静に対応できるだけの懐の深さがあることが分かったのは、私にとっても良いことでした。心配がひとつ減りましたから。

とにかく、夫の早寝計画は、これにて終了といたしましょう。そうでないと、私の方が睡眠不足で大変なことになる気がしますし。明日は、夫への謝罪を込めてゆつくり寝かせてあげて、焼きたてのほかほかパンを用意することにしました。どうやら夫は焼きたて

パンが好みの方ですから、心を込めて焼き上げてみせましょう！

翌朝。

・・・寝坊しました。

7 夫を躰直します。爽やかにさせましょう。？

『現妻による、未来の妻のための、夫の再教育計画』は予想以上に順調に進んでいます。

計画を開始してから、夫との会話が何となく増えてきました。相変わらず夫から話しかけてくることはほとんどないのですが、私が話していることに相槌や質問をしてくれるようになりました。

奥側で寝てもらおうようになってから、夫も夜更かしせず私に寝る前に寝てくれるようになりました。ただ、毎朝起きると私が必ず奥側になっているのが不思議です。夫は気にしていないようなので、私もあまり気にしていないのですが。

それにしても、夫の躰直しを志して、わずかひと月で脱・無い無い尽くし！

なんて素晴らしいのでしょうか！

これなら次なる段階へ移ってもよさそうですね。

外から帰って来た夫にお風呂を勧めて、その間に散髪道具と髭剃りを用意。お風呂から出て来た夫をそのまま捕獲する計画です！

前からずっと気になっていたんですね。

夫は髪はボサボサ、髭も無精が過ぎて結構な長さになっています。それが尚更クマさんっぽくて私的には気に入っているのですが、清潔感が無いのは、やはり世間一般の女性受けが悪いそうですね。

と言う訳で、剃ってしましましょう。

題して、『さわやか夫計画』発動です！

いくら無精とは言え、ただ座っていてくれればいいわけですから、問題ないでしょう、と思っていたのですが、夫は私の予想の斜め上を行いました。

散髪道具を持って笑顔で出迎えた私に何を思ったのか、お風呂場から出てきた夫が椅子を引っ張って来て私を座らせました。自然な動作で勧められてつい座ってしまいました。これじゃ逆ですよ？

私の髪は伸ばしっぱなしですが、いつものまとめて上げているので全く邪魔にはなりません。それなりに気を遣っているので時々上げる形を変えたりして遊んでいます。短く切るのもいいかなと思うのですが、こちらの女性たちはみんな髪が長いので何となくそのまま伸ばしたままにしています。

もしかして、切ってくれるのでしょうか？

ちよつと期待を込めて待っていると、まとめ上げていた髪が解かれました。紐とピンとで複雑に編み上げていたはずなのですが、引っかかり痛みを感じることなく背に髪が流れて行きます。

編み込みをほどこいたばかりなので、どうしても髪はぐちゃぐちゃです。それを先のほうから少しずつ、丁寧な手つきで櫛を通していきます。夫の手の温もりを首筋に感じて少し顔に熱が集まって来ました。お風呂あがりです。温かいんですね、きつと！

丁寧に時間をかけて櫛を通したあとは、程よい強さの指圧が肩から首筋、頭へと施されて行きます。

うああ、気持ちいい・・・。

この時にはもう、自分が何をしようとしていたか目的を忘れてしまいました。

まさか夫にこんな特技があったなんて。

絶妙な力加減、ツボを心得た的確な指圧で、凝り固まっていたものが溶けて消えて行くのがわかります。

きもちいい・・・。

全身がとろけてしまいそうな心地よい至福のひとつきを堪能している間に、いつの間にか眠ってしまっていたようです。

目が覚めると、いつもの朝でした。

ああっ、私のバカっ！！

せつかく夫が特技を披露してくれていたというのに、眠ってしまっうなんて、なんてもったいないことをっ！！

全部を堪能することはできませんでしたが、すごく、すごく気持ちよくて、つい夕ご飯も食べずに眠ってしまいました。

夫の指圧のおかげか、ここ最近の寝不足や不安、焦燥感を全く感じない爽やかな目覚めです。

夫にお礼を言おう、とまだ眠っている夫をそつと起こそうとして、固まりました。

・・・クマさんは、ぬいぐるみから野生への帰還を果たしたよう

です。

夫を躰直します。爽やかにさせましょう。？

ボサボサだった髪は襟足にかかるくらいに、伸び放題だった髭は綺麗になくなっていました。

初めて見る、夫の素顔です。

それにしても、これはいったいどういう魔法でしょうか？

クマさんっぱさは残しつつも、縫いぐるみのような気安さがなくなつて、野生の獣に対峙してしまったような緊張感が生まれます。

普通、ヒゲとかが無くなったら、爽やかになるはずですよ？

それなのにどうして、髪を短くしてヒゲを剃り落とした今のほうが野性味がにじみ出てくるんでしょうか。

もしかして、ぼさぼさの髪とふわふわのヒゲが緩衝材の役割を果たしていたのかもしれませんが。ぬいぐるみのようなふわふわ感という視覚的な緩衝材がなくなつて、鋭さとか厳しさが浮き彫りになっているような気がします。

いや、と言うか、これ本当に夫ですよ？

ちょっと不安になつて、少し距離をとりつつ、腕にそーっと手を伸ばしてみます。あ、この感触は間違いなく夫ですね。安心しました。何だか不思議な感じですが、とにかく夫を起こして着替ええないことには朝食が作れません。

そういえば、夫はお夕飯どうしたんでしょう？　もしかして、夫も食べていないのでしょうか。だとしたら、非常に申し訳ないです。早く朝食の用意をしてしなければ、と夫をゆり動かそうとして、固まりました。

野生の獣、いやいや野生のクマ、じゃなくて夫が、じつ、ところらを見ていました。

どういうわけか、いきなり頭に血が上って、自分の顔が急に赤くなるのを感じます。

思わず、夫の腕に置いていた手を素早く引っ込めようとして、それ以上に素早い動きで夫が私の手首を捕まえました。

相変わらず、寝起きとは思えない反射神経ですね、だから掴んだ手首を不思議そうに見るのはやめてください、何でこんなところに手があるんだろう、って思ってますよね、齧られそうで怖いのでほんとやめてください、って、顔をこすり付けるのもだめです！！

「だ、旦那さま！？」

手のひらから伝わる熱が、そのまま全部私の顔に移動しているのかも、というくらい、顔が熱くなってきました。

いつもはひげでふわふわとしている夫の頬が、さらっとしていて直接皮膚に触れている感じがなにやら非常に恥ずかしいのですが、と主張していいものかどうか悩んでいるうちに、夫がそのまま手のひらに唇を当てました。

「おはよう」

く、唇の動きがああああっ！？

「お、おはようございました！」

限界ですっ、無理です！

おかしな挨拶をしてしまったような気がします、それどころじゃないんです！

涙目になりながら夫から手を取り返すべく振り払おうとしたのですが、少しも動かないばかりか、どう掴んでいるのか手首から先に力が全く入りません。

離・し・て・っ！（泣）

なんだかいろいろな許容量を超えてしまった私は、手のひらに伝わる感触ばかりに気をとられていて、忘れていました。挨拶と一緒にやってくる、あれを。

手のひらから夫の顔が離れて、ほっ、と息をついた瞬間。

ちゅ。

！？

真っ赤になっているであろう頬に当たった、柔らかくて暖かな感
触。

軽い音を立てて離れていったそれは、逃げる間もなく反対側にも
落ちてきて。

ちゅ。

！！

声も出せずに茹でだこ状態で限界を突破した私は、掴まれている
いほうの手で自分の頬を押さえて寝具に突っ伏しました。本当は、
夫に頭突きしてやりたかったのですが、もういろいろ駄目です。こ
れ以上、夫との接触は無理です。勘弁してください。

物置部屋の修理、私がやっちゃいましょう。そうしましょう。

寝具に埋もれてそう決意していると、夫が掴んでいるほうの腕が
軽く引つ張られました。寝具の隙間から夫を伺うと、期待に満ちた
目でじっと私を見ています。

なんだか、嫌な既視感が……。

だから、なんですか、その目は。
なんで、自分の頬を指で叩いているんですか。
なんで、顔を近づけてくるんですか!?

……ふわふわクマさんの緩衝材は、視覚的だけじゃ、無かった
ようです。

8 夫を躰直します。お出掛けしましょう。？

夫の習慣に、寝る前にヒゲを剃るのが追加されました。

・・・ほんとに、朝の挨拶は、もう、いいです。

普段は着替えのためだけに使用している物置部屋を、久しぶりにすっかり点検してみました。以前よりも物が散乱していましたが、特に置いてあるものが湿気っていたり、かびたりしていません。念のため、前に雨漏りしていた部分も見てみましたが、特に問題はなさそうです。

そういえば、雨の日の朝でも水漏れしていませんし、着替えるときに寒いということもありません。

と言うことは、夫はいつの間にか物置部屋の雨漏りと隙間風を直してくれていたようです。まだやってないのかと思ってました。疑ってすみません。

でも、これなら少し片付ければすぐにでも使えますね！ 以前あった予備の敷布団は見当たりませんが、あとでゆっくり探してみましよう。多分どこかに埋もれているはずですよ。

爽やかに野生のクマさんへと変貌を遂げた夫は、いつも通りの無表情で日々を過ごしているわけなのですが、フワフワの緩衝材がなくなつたその表情は三割り増しに緊張感と危機感を煽ります。

いえ、夫の中身は変わっていないんですけどね、感じ取る側の、つまり私の方に問題があるわけですね。人の見た目ってやっぱり大切ですね。

見慣れない夫の顔を見ていると、それまで気づかなかった細やかなところに気づくようになりました。

たとえば、夫は背が高いので私が話そうとするとちょっと屈んでくれていたり、時々視線を在らぬ方向へ向けて何かに注意を払っていたり。

これまではボサボサの髪が邪魔をしてあまり見えなかった夫の視線の動きがはつきりと見えるようになって、あ、今何の本を読もうか迷ってるな、とか、探し物が見つからなくて困ってるな、とか見て取れるようになりました。

うん、見た目は大事です。

ところで今日は、一月に一度、街へ出る日です。

いつもなら10日程前に行くはずだったので、今月はどうやら日程がずれたようですね。これまでもそういうことが何度かありました、今回ほどこの日を首を長くして待っていたことはありません。

夫との離縁を決意してから初めて街へ出るんです！

いつもなら週に一度は遊びに来てくれる友人も忙しらしく、この一月半一度もあっていません。今回の街での集会に友人も参加しますから、その時にいろいろと相談したいと思っているんです。

そう、私が夫と離縁する期限まで、あと一月半しか残っていないのです。

出来れば今日中にすべての問題点を解決しておきたいところです。

なにしろ、いつ夫が帰ってくるか分からない家の中で離縁の手続きについて相談するわけには行きませんか。

と言う訳で、朝から気合いが入っている私は、朝食後にはしっかりと余所行き用の服を着て準備万端整えていました。

そんな私を夫はどこか不機嫌そうに見ています。夫はこの一月一度の集会をあまり快く思っていないようで、出発前は不機嫌になります。

いつものことなのですが、なにしろ今は野生に帰っていますので、迫力が三割増しで正直ちよつと怖いのでやめてほしいんですが。

夫は嫌そうな雰囲気を出しながら、着替えるために寝室に入っていきました。扉を閉めないままにしているので、夫が棚を開けているのが見えます。私はちよつとわくわくしながら、後ろを向いて夫が寝室から出てくるのを待ち構えていました。

機嫌が悪い時の夫は、棚の一番上にある物をそのまま着るのが癖。そして部屋から出てきた夫が着ているものをみて、心の中で叫びました。

よっしやあーっ!!

狙い通りです、ぴつたりです！

夫が着ているのは、黒に近い深灰色のズボンと裾に白い線を入れた薄い青のシャツ。

私がこの日のために用意しておいた服です。実はあと何種類か用意してあるのですが、そちらはまた次の機会に。もちろん、これも『現妻による、未来の妻のための、夫の再教育計画』の一環ですとも！

そうです。今回は、『夫の出無精改善計画』発動です！

夫が仕事で外に出ているのは知っているのですが、お休みのときは大体家に居ますし、私を連れてどこかに出かけるのは、この月に一度の集会だけ。

これでは、倦怠期の原因になりかねませんから、ここは未来の奥さまのためにも、外出に慣れていただくという計画です。

といっても、今日は私が忙しいので、ちょっと夫の服装を余所行きっぽくしてみただけで終了ですが。

今度のお休みのときは、一日外に連れ出してもらう予定です。ええ、私が勝手に決めた予定ですが、何か？

ついでに別の計画も同時進行ですが、それは次の取って置き服を夫が着るときに。

それにしても、我ながら、良く似合っています。

いい仕事したな、私！

「お似合いですよ！」

嬉しくなつて、つい満面の笑顔で夫と私の功績をたたえと、夫が少し瞬きをしました。それから、自分が着ている服を見下ろして、あれ？ 少し、動揺していますか？

「・・・いくぞ」

行きますとも！

いつもよりも少し早く、お出かけ開始です！

でも、ちょっと気になることがひとつ。

・・・夫の耳が少し、赤くなっていますか？

夫を躰直します。お出掛けしましょう。？

一ヶ月に一度、必ず参加するように義務付けられているその集会は、別名、『賢妻の勉強会』と呼ばれています。あ、賢妻というのは、主催者のことですよ？ 決して参加者である私たちのことではありません。男性の参加者もいますしね。

この会は私たちの保護者のお家で開催されるのですが、今のところ、私を含め5名の男女が勉強と情報交換を行う場として、午前いつぱいをここで過ごします。つまり、私の保護者の奥方さまが賢妻なのです！ とても頭の回転が速い方で、いろいろなことをご存知でいらつしゃいます。

とても素敵な方で、実は私の憧れの女性でもあります。

その方がこの街に不慣れな私たちが少しでも早くこの街に慣れるようにと、常識や礼儀作法、この国の歴史など、その時々でいろいろなことを教えてくださいます。同じような境遇の仲間もいますので、お互いに情報交換し合い、協力し合うことができるようにと、この場を設けてくださっているわけです。

本当に素敵です、奥方さまはっ！

保護者である方ももちろん素晴らしい方なのですが、私としては、やはり同じ女性の奥方さまのほうに憧れを感じます。

夫に送ってもらって、ちょっと早めに到着したと思ったのですが、すでに他のメンバーは揃っていました。やっぱり一月半ぶりで、皆さん張り切っているのでしょうか。

その中に黒髪黒目を持つ友人の姿を見つけてほっとしました。よかった、参加していなかったらどうしようかと。それにしても、相変わらず友人はおしゃれさんですね。

きちんと折り目の付いたズボンに、友人の細身を引き立てる上着。薄い色合いの茶色でまとめられているのですが、袖や襟の部分にさりげなくあしらったレースが技ありです。

馬車の御者台から降りようとすると、夫が手を貸してくれました。うん、会話が増えるようになってから、こういった手助けも増えてきたように思います。進歩していますね！

「あ、あの、今日は午後も友人と過ごしたいので、夕飯は先に食べてくださいね」

夫が一瞬、とても厳しい視線を友人に向けたような気がしたので、主催者である保護者の奥方さまの姿が目に入ると、小さく息をついて頷きました。

「帰りは、馬車を」

今の視線は一体なんだったのだろうとちょっと考えていたのですが、夫の声に意識を戻しました。

えーっと、今のは、馬車を使って帰って来いつてことですね。了解です！

「はい。いってきますね」

笑顔で小さく手を振って夫に挨拶をすると、夫はなにを思ったのか、その手を素早く掴んで手のひらに唇を寄せました。

相変わらずの早業ですね、って……。

っな、なにしちゃっているんですか、このひとおおっ!?

ここ、外ですよ!?

家の中じゃないんですよっ!?

保護者の奥方さまや他の参加者たちがこっちを見えます、見られてますよっ!! っていうか、み、見ないでくださいっ!!

顔から火を噴出しそうな勢いで赤面していたのですが、ふと、夫のほうを見て、硬直してしまいました。

凄みを利かせた夫の視線が一瞬もそれることなく、私に突き刺さっていて。

背筋に、冷や汗が。

「必ず、戻れ」

低い、厳格な声。決して、外れない視線。

なぜ、今、このときに?

思わず、本能的に後ずさりそうになったのを、意思の力でぐっとこらえました。

今の夫に、不審に思われるような動きをしてはいけません。全てを見透かすような瞳に、うろたえてもいけません。

「……はい」

今日は、まだ。

「ちゃんと帰ります」

ねえ、旦那さま。

・・・私は、ちゃんと笑えていたでしょうか？

9 友人に手続きを教わりましょう。?

夫を見送った後、ふらふらになりながらお茶会に参加しました。

奥方さまからの生暖かい目も、参加者たちからのからかい混じりの冷やかしも、ただひたすら私の精神を削り取っていきます。

・・・お茶会が終わる頃には、精神的な疲労感に机に突っ伏して動けなくなっていました。せつかくのお勉強会の内容も、奥方さまの素敵な服装も、全然頭に残っていません。

「赤くなったり、青くなったり。ずいぶん忙しそうだ」

「・・・レイン」

笑い混じりの友人の声に思わず恨みがましい視線を向けてしまったのも、疲労感のせいですとも。ええ、決して八つ当たりではありませんよ。

「なかなか面白いことになっていそうだな」

「ええ、そうですよ、だから今日は一日付き合ってくださいね」

覚悟してくださいね。

ドスを効かせた声で言えば、私よりも少し背が高い友人は軽やかな笑い声を上げました。

「私でよければ。ひとまず、昼食でもいかがかな、お嬢様？」

「いえ、夕食まで要求します」

ドサクサにまぎれて夕食まで強請ると、友人は驚いたように目を瞬かせ、すつ、と気遣わしげな視線になりました。私と同じ、真っ

黒の髪と瞳。表情はおどけたままなのに、どうしてでしょう。私の周りは瞳で感情を表現する人が多い気がします。

「では、夕食後の甘味まで、お付き合いいただけますか？」

わざとらしく気障ったらしい動きと声で誘う友人の気遣いに、私はようやく机から顔を上げて、立ち上がりました。

「よろこんで」

お互いに正式な作法で礼をして、友人が少し曲げて差し出してきた細い腕に、自分の腕を絡めて歩き出します。友人は私の顔を覗き込んで、いたずらっぽく目をきらめかせました。

なんだか、いやな予感がします。

「ああ。もちろん帰りは情熱的な『旦那さま』の元まできちんと馬車でお送りいたしますから、ご安心を」

「・・・レイン、それ、減点です」

楽しげにからかう声に、腹立ち紛れに掴んでいた腕を思いっきりつねってやりました。

奥方さまにお茶会のお礼と退室の挨拶をしてから、私たちは街の食堂に入りました。

食堂といっても友人が選ぶ場所は、いつも少しおしゃれな、けど少し賑やかな居心地のよいお店です。

私はいつもこの友人に街を案内してもらっているのですが、毎回連れて行ってくれるお店が違います。あまり外出しない私のために、街のいろいろな場所を案内しようとしてくれる友人は、本当に気遣

いの達人だと思います。

夫もこれくらい気遣いができる人になったら、引く手数多になること間違いなしなんですけどね。一度夫に手ほどきしてほしいくらいなのですが、今朝の夫の視線を思い出すと・・・うん。やっぱり、却下です。

「ところで、今日の『旦那さま』はずいぶんと爽やかだったね。あれは君の仕業でしょう？ 服も君が用意したものだね？ 良く似合っていたよ」

「いや、あれは私の仕業というか、仕業にしようとして失敗したというか、でもきっかけにはなったのかなと」

まあ、結果的には緩衝材がなくなつて、自分で自分の首を絞めてしまったような気がしないでもないのですが・・・。

それにしても、遠目でちょっと見ただけで夫の変化に気付くなんて流石ですね。この友人は普段から服装に気を使っていますから、似合っているといってもらえたのはちよつと嬉しいです。

「なるほど。ついに無い無い尽くしから脱却できたわけか。よかったね」

「そうなんです。でも、まだ、これからですよ！」

思わず有頂天になってしまいそうですが、ここはぐつと我慢です。それでも嬉しくてニヤニヤしてしまうのは仕方がないんです。努力が多少実ったら、嬉しいのは当たり前ですからね！

だけど、レインさん。

・・・ほほえましげに生暖かい目で眺めるのは、やめてください。

友人に手続きを教わりました。？」

「それで？ 今日はい体、どうしたの？」

いつの間にか料理の注文も終え、わざとらしいまでの男性のような動作としゃべり方をやめて素に戻った友人は、軽く身を乗り出して聞いてきました。

そうです。私も時々忘れてしまいそうになるのですが、この友人はれっきとした女性です。季節がめぐる前に離縁するまでは、ふわふわのスカートが良く似合う、それはそれは可愛い女性姿をしていました。

離縁をしてからしばらくは保護者の元に居たのだそうですが、こちらも季節がめぐる前に独り立ちして、今は小さな店を開いています。

とはいえ、女性の一人暮らしは何かと物騒。

ならせめて見た目だけでも男性のように振舞えば危険が減るのでは、という考えから始まった男装だったのだそうですが、今では基本が男装になっています。女性客も着々と増えているそうで、しばらくこのままで行くそうです。

そんな活動的な友人の午後の時間を丸々取ってもらったのは、他でもありません。

「離縁の手続きを教えて欲しいんです」

「・・・は？」

今日の一番の目的を告げると、男装の友人は驚きを素直に表現してくれました。大きな目がさらに大きくなって落っこちてしまいうです。

なんだかこの表情は何かに似ていますね。何でしたでしょうか？
・・・あ、分かりました。驚いて固まってしまった猫にそっくりです！

それにしても友人はこんなに可愛らしいのに、どうして男装をしているときは、ちゃんとした男性に見えるのでしょうか。不思議です。恐らくちよつとした仕草の影響だと思うのですが、やっぱり見た目は大事ということですね。

「誰が、なんのために？」

「私が、離縁するためですが」

そんなに私が離縁しようとするのは意外だったのでしょうか？友人が少し青ざめているように見えます。

私としては、離縁をしたいといえば友人は嬉々として手伝ってくれるだろう、と勝手に思っていたのですが、この様子だと、そう簡単にはいかないかもしれません。

複雑な感情が渦巻く視線で見つめられて、小さな不安が芽生えてきました。

・・・もしかして、友人は知っているのでしょうか？ いえ、そんなはずはありません。ありません、よね？

小さな不安が少し大きくなりかけたとき、私を見つめていた友人が視線をそらして小さく息をつきました。

「もう決めたんだね」

「はい」

離縁の理由や原因は尋ねずに、静かな声で確認だけをしてくる友人は、私のことをよく分かってくれています。

「私は馬に蹴られて死にたくはないのだけど、その笑顔は、何を言っても聞いても無駄ということだね。じゃあ、ひとつだけ君にお願いだ」

再びため息を吐いて早々に詮索も説得も諦めてくれた友人に、私は笑顔のままうなづきました。関心が無いのではなく、私の意思を尊重してくれているのだと知っています。

そして、それを知りながら堂々と甘えてしまうのが私です。だからせめて友人のお願いぐらいいは聞いてあげたいとは思っているのですが、この友人のお願いごとは私の手に負えないことが多いんですよ。

ちょっと警戒しつつ、友人の言葉に耳を傾ける姿勢をみてとった友人は、可愛らしい顔を悲しげに歪めました。

「私が会いたいと思った時に会えないような、遠くへは行かないで」

・・・この友人は、本当に、どこまで分かっているのでしょうか。

一瞬、呼吸が止まったのを誤魔化すために大きく息を吸い込みました。

すると、友人の大きな瞳が恫喝するようにスツと細くなり、鋭く、冷たい輝きをみせます。

「約束できないのであれば、協力はしない」

友人は、本気です。

外見の可愛らしさにだまされがちですが、友人は誰よりも己に厳しく、一度決めたことはどんなことでもやり遂げるだけの強い意志と行動力があります。

そうでなければ、離縁も起業も、たった一人でやり遂げることなんてできません。

その友人が本気で協力しない、と言ったら、本当にしないでしよう。それどころか、的確に邪魔してきそうな気がします。

でも、守れない約束も出来ません。

威嚇する猫のような悲しげな目で睨んでくる友人に私は大きく深呼吸をして、決心しました。

本気には、本気で返しましょう。

「レイン、私はこれから起きることは約束出来ません。未来はいつだって不確かで、私の予想の範疇をいつも軽々と超えて行ってしまうからです」

未来は誰にも分からなものですし、予想外にもほどがあるような事態が起きたりします。実際、私も友人もそれを嫌になるほど、経験していますしね。だから、約束は出来ないのですが。

「でも、努力することは約束します。いつでもレインに会えるように最後まで諦めないで足掻いてみせます」

未来に起こることは約束できなくても、それに立ち向かえるかどうかは、私の意志にかかっています。私の意志は私だけのもの。それなら、約束できますから。

「この約束じゃ、だめですか？」

悲しげな厳しい目で私を睨んでいた友人は、少しの間目を閉じて、大きく息を吐き出したあと、ちよつとふてくされたような視線を投げかけてきました。

「きちんと守ってくれるなら、それでもいい」

「ちゃんと守りますとも！」

どこかで折り合いをつけるような、意図的に落ち着いた声で友人が答えたので、力強く約束しました。

よかった、もう悲しそうな目はしていません。

ほつとしたところで、ちょうど料理が運ばれてきました。大きな葉で包まれていて、見たことも無いような道具と一緒に私と友人の間に並べられて行きます。

「取り合えず、先に食事にしよう」

賛成です。食事は全ての活動の源ですからね！

・・・ところで、これどうやって食べるんですか？

友人に手続きを教わりましょう？

流石に行動派の友人だけあって、その後の動きには全く無駄がありませんでした。

どこに何を提出して誰に挨拶に行かなければならないかを説明しながら、実際に訪れなければならない場所を下見させてくれて、書類も手に入れてくれました。

私はあまり物覚えの良い方ではないので、必死に覚書に書きつけながら手順を何度も復唱しています。思っていた以上に手続きが複雑で、とても一日ではすみそうにありません。離縁するのって大変なんです！

「手続きはおおよそこんな感じだけど。離縁したあと、どうするか決めるの？」

手続場所を巡り細やかな説明を受けていたら、あつという間に時間が過ぎて行きました。少し買い物にも付き合って貰って、近くの食堂で夕飯を取ることにしました。ここなら夜でもあいている甘味店も近く辻馬車の乗合所も近いのだそうです。

「そうですね、一度、保護者の元に身を寄せようかと」

「じゃあ、私のところにくればいい。店の手伝いと家のことをやってくれるなら、一部屋提供するよ」

「そこまで迷惑は・・・」

「迷惑かどうかは私が決めること。で、誘っているのは私。いいからつべこべ言わずに、来なさい」

もう、本当にどこまで気遣い人間なんですか！
でも嬉しくてついニヤニヤしてしまいます。友人と一緒に暮らすのもなんだかとても楽しそうですね。

それにしても、こんなに気遣いが出来て、とっても可愛らしくて行動派な友人に季節が変わる前に離縁された元旦那さまは一体何をしでかしてしまったのでしょうか。こんなに良い人と結婚したのに離縁されてしまったのですから、非常に気の毒な気がします。それも今日の友人の手続手順は無駄がなく、迅速に離縁は行われたのは間違い有りません。

友人が聞いて欲しくなさそうにしているので、これまで一度も聞いたことが無かったのですが、聞いておけばよかったです。

店の入り口に近いところに座っていた私は、すぐに気づいてしまいました。

間の悪いことに、友人の元夫が入ってきたのです！

確かに同じ街に住んでいるのですから、遭遇する確率は皆無ではありませんが、ここは住んでいる人口も多く、街全体が一つの巨大な都市を形成していますし、元夫は確か中央部付近に住んでいて仕事もその近くだったはずですよ。

どうしてこんな南のはずれのレストランにいるのでしょうか。

しかも元夫の隣にいるのは、私の知り合いでした。

この街の教会の教師と呼ばれる、布教家です。残念ながら、私の数少ない知り合いの中でも、会いたくない人物の一人です。なんて間の悪い。

友人は、それまでの楽しそうな表情を消して、無表情で元夫を見たかと思うと、素早く男性の仮面をかぶったようでした。私もそれにならって、唇を引き締めました。

話しかけてくれるな、という気配を必死に出すのですが、やはり空気の読めない男二人組には通じなかったようです。

こちらに気づいた教師がまず寄ってきて友人と私に挨拶をしました。

「珍しい組み合わせですね。今日はお店の方は良いのですか？」

そりや珍しいでしょう。私たちがいつしょに街に出るのは、月に一回ですから。そうでないときは、たいていお互いの家でおしゃべりしていますし。というか、なんで話しかけてくるんですか、この人は。

「おそらく、私たちの方が驚いていますよ、フローイン教師。こんな時間にあなたがいらっしゃるなんて。うちの店の店員たちは優秀なので、私がいなくても問題ありませんので、ご安心を」

流暢に返答する友人がとても頼もしく見えます！

人によつてはこの教師のことを憂いを帯びた美貌の持ち主とか、清廉潔白な敬虔な教師とか言われているそうですが、私にとってはただの天敵です。

「レイン、」

「こんばんは！ そちらも珍しい組み合わせですよね！？」

私の天敵と会話という名の壁を作ってくれた友人のためにも、今度は私が友人の天敵の壁になる番です！

友人に話しかけようとした元夫の言葉を思いつきりさえぎって話

しかけます。

「引きこもりの君に、俺たちが一緒に居ることが珍しいかどうか、分かるとも思えないが」

撃沈しました。

そういえばこの人は夫の友人だったような気がします。
し、しかしここで私が沈没しては、友人がこの元夫の対応もすることになります。なんとしてもそれは阻止して見せますとも！

「引きこもりじゃなくて、あまり街に来ないだけです！」
「どちらでも同じだろう」

まあ、確かにあまり街の情報には詳しくないかも知れませんが、少なくとも私の夫よりはこの街のことを知っていますとも！ と言いたいところなのですが、残念ながら比較対象が夫ではちっとも凄くありません。無念です。

「じゃ、教師さまたちもごゆっくり」

教師と談笑していた友人が私の不利をみてとったのか、教師に別れの言葉を送っています。が、空気を読まない教師は私の方をちらりと見ると、私たちのすぐそばの席を指差しました。

「こちらの席は空いていますか？」
「フロイン教師。私たちはこれから内緒話をするので、遠慮してください」

友人がたしなめるように言っていますが、私の方は友人の影から

心の中で威嚇しています。

どうしてもここに座るっていうなら、私たちは帰るか店を変えるかします。流石にその意図は伝わったのか、教師は大袈裟なほど残念がりながらも元夫を連れて奥の方の席に移動して行きました。

私はすかさず友人をそちら側から見えないであろう席に移動させました。何があつたのかは分かりませんが、ひとつだけ言えることが有ります。

間違いなく、元夫は未練たらたらずです。

だってさっきの会話の間中、友人から一瞬も視線を外しませんでしたから。本当に、何をやらかしたのでしょうか、あの元夫は。

移動する二人の背中に警戒のまなざしを投げかけていると、嬉しいうつな、困ったような、複雑な表情をした友人が私の髪をちよつと引っ張って注意を引きました。

「今の君の様子を例えるなら、怯えながら毛を逆立てて子猫守る母猫のようだよ」

「そういうレインは、思春期の娘に近寄る男を降り落とす父親のようです」

お互いに顔を見合わせてちよつと笑いました。予定外の天敵と会ってしまいました、友人と一緒によかったです。

「離縁が成立したら、いつでもうちにおいで。父様が君を守ってあげよう」

「その時は母様がしっかりとお世話させて頂きますね」

笑い合いながら、おどけることができました。
・・・よかった、私も友人もまだ大丈夫です。

友人に手続きを教わりましょう？

私たちは奥にいる2人に警戒しつつも、食事と会話を存分に楽しみました。

せっかく久しぶりに会ったのですから、楽しまないと損ですね！

それから、今後必要になるであろう情報や幾つかの頼み事をして、食堂を出ました。ちゃんと二人組にも挨拶をしましたよ？ 嫌々、でしたけど。

友人は、馬車に同乗して家まで送ってくれました。私は馬車の御者に友人を送ってくれるように頼み、家の中に入ります。

友人のおかげで、今日は、とっても有意義な一日になりました。

あとは、今鞆に入っている書類と覚書をどこに置いておくかが問題ですね。忘れないうちに書類の記入もしなければ。今日はもう遅いですが、明日は物置部屋を片付けるつもりなので、その時にどこかに隠しておきましょう。

私は心配事がひとつ減って、少し気分がフワついていたようです。無警戒で家の中に入っすぐに、壁にぶち当たりました。自分の家に帰ってきたのに、警戒なんてしませんよね、普通。慣れた自宅で一体なににぶつかったのかと視線を上げて、冷水を浴びせられたように一気に現実に戻って来ました。

壁だと思ったのは、夫の胸元だったようです。

な、なんで夫が扉のすぐ前に立って居るのでしょうか？
その顔がもの凄く不機嫌そうなのは気のせいだと思っています。

「た、ただいま帰りました。お出かけですか？」

扉の前に居たということは、出掛けようとしていたのかと思って聞いたのですが、夫は小さく首を振ります。出掛けるわけではないんですね。

夫はまだ開いている玄関の扉から外をチラリと見て、遠ざかる馬車を確認したようでした。夫がさっぱりしてから視線を追えるようになったので良く分かりますが、どうしてそんなに憎々し気に馬車を見ていたのでしょうか。

私ちゃんと言われた通りに馬車で帰って来たんですが、と主張しなくなった頃、夫は腕を伸ばして私越しに玄関の扉を閉めると、ひとつ小さく息をついて私を睨んできました。

も、もしやお叱りですか！？ そんな理不尽なっ！

「おかえり」

びくびく怯えつつ反応をうがっていたら、夫がたった一言、言いました。

そういえば、帰ってくる夫を出迎えたことはあっても、出迎えられるのって初めての経験です。普段はこんなに遅く帰ってくることも有りませんし。

どうしましろう、嬉しい、です。

「・・・ただいま」

もう一度挨拶を返すと、夫は頷いていつもの定位置であるソファに腰掛けて本を読み始めました。

何の本を読んでいるのか、彫像のように無表情で視線だけが動いています。本に集中しているときの夫は、意識を他のことから完全に隔絶していますから、安心して眺められるんですね。

いつも以上に激しく鼓動を繰り返す胸を手で押さえますが、一向に落ち着く様子がありません。

ただ、夫に出迎えて挨拶をしてもらっただけなのに、どうしてもなんにも嬉しくて、少し恥ずかしいような気がするのでしょうか？
ああ、駄目です。これ以上、考えてはいけない気がします。

私は小さく首を振って、思考を追い出すと、着替えるために物置部屋に入りました。

改めてみると、本当に以前よりも物が増えていますね。

着替えのためだけにここを使っていたので、気づきませんでした。でも、大小様々な物が置いてありますが、やろうと思えば半日で私一人寝れるように出来ると思います。

でも。

もうちょっと、このままでもいいかな、と。

だって、長くてもあと一月半ですし。片付けるのも大変ですし。

そう、それにここを片付けたら書類が隠せないかもしれません。

うん、物置部屋はこのままにしておくということで。

手早く鞆の中から紙の束を出して隠そうとして、重なっていた箱

を崩してしまいました。物置部屋はこのままにすることにしましたが、ちよつとは片付けたほうがいいかも知れませんね。

ついでに鞆は入り口近くの棚に置いておきました。あまり使わないですが、次の計画がうまく行けば、すぐに使うことになるかもしれませんから、しまいませんよ。ええ、きつとすぐに必要になりますとも。

着替えを終えて物置部屋から出てなんとなくソファの方を見ると、夫が居ませんでした。本だけが無造作に伏せられています。あれ？ やっぱり出かけたのでしょうか。

無意識に室内を見回して、落ち着いていたはずの心臓が大きく跳ねました。

夫は出かけていません。いました、すぐ側に。

さっきは玄関の真ん前に立っていたわけですが、今度は扉の横、ちょうど部屋の外に出なければ見えない位置で壁に背を預けて立っています。

物置に置いてある物が取りたいのかと思って扉からずれて場所を譲ると、夫の目が細くなりました。え、なんですか、なんで睨まれているんですか！？

理不尽さに抗議しようとして、ふと違和感を感じました。

違和感というか、圧迫感？

これは、睨まれているわけじゃなくて、威嚇されているというか、狙われて、いるような・・・。

背筋に走った悪寒が走り、思わず体が後ろに下がってしまいました

た。あ、と思った瞬間、夫に捕獲さ・・・抱き上げられていました。

「だ、旦那さま!？」

自分の意思とはべつにいきなり視界が高くなったら、しがみつくしかないわけで。

体を安定させる為に縋り付いた首の太さと肩幅の広さをじかに感じて、やっぱり夫はクマさんみたいだと思ったり。

・・・どうやら私、焦り過ぎて頭の何処かがねじれてしまったみたいですね。

非常に近くなった夫の顔をそつと仰ぎ見ると、夫は厳しい表情で私を見たあと、物置部屋に視線を移しました。

そして再び私に視線が戻ってきた時には、いつも通りの無表情ながら、どこか戸惑うような、気まづげな様子。

ここ最近よく思うことですが、一体どうしたのでしょうか、夫は。

「旦那さま？」

もう一度声を掛けると、夫は私を抱き上げたまま寝室に入り、私を寢床の奥側へ寝かせるとそのまま夫も寝具の中に入ってきました。

「あの・・・？」

「おやすみ」

何かなんだか分からないのですが、夫が私を腕に抱きかかえたまま目を閉じました。

私、まだお風呂にも入っていないですし、片づけも明日の朝食の下ごしらえもしていないのですが。

でも、夫の腕が暖かくて、春が近いとはいえ、まだまだ肌寒い夜に心地よくて、なんだか眠くなってきたし、まあいいか、と。

明日のことは明日にしましょう。

「おやすみなさい、旦那さま」

ふう、と息をついて夫と同じ様に目を閉じました。温もりと安心感に包まれて、あっという間に穏やかな眠りに落ちて行きます。

・・・翌朝、羞恥のあまり転げまわりました。

10 夫を躰直します。計画を練らせましょう。

「お出かけしましょう」

明日と明後日は夫がお休みです。

昨日確認したら、特に予定がないそうで、こっそり心の中で喝采を上げました。ちょうど、先日友人に頼んでおいたもの、各地で行われている集会の招待状が届いています。

夕食後、私はそれらの招待状を目を瞬かせている夫の前に差し出しました。

そう、今回は、『夫に外出の予定をたててもらおう！ 計画』です！

本当は私が外出先を決めて、夫について来て貰う方が簡単だと思います。最近の夫の様子なら、たぶん不機嫌そうにしながらもついて来てくれるだろうな、とは思っています。

でも、今回はあえてさらに難易度をあげてみました！

リーフェリア祭が近づくこの季節、普段以上に各地で集会や小さなお祭り、劇などの文化的な催しものなどが開催されるので、予定を立てるには丁度いい時期なんだそうです。

なので今回は、未来の奥さまとのお出かけ先を、夫がいつでも思いつけるように練習してもらおう計画です。

正直言うと、私もこういった計画を立てることは苦手なのですが、

友人いわく、いかに伴侶との外出を演出し、楽しませるかが男性側の腕の見せ所なのだとか。

さすが、完璧なる男性像として世の女性たちの人気を博している友人だけあります。私はすっかり乗り気になりました。

ぜひ、夫にも完璧なる男性像を身に着けてもらい、未来の奥さまに喜んでいただきましょう！

期待を込めて夫を見ていると、その視線が招待状の束と私の間を何度か行き来したあと、ふと逸らされました。これは、無視してなかったことにする方向ですね！？ そうはさせません！

「旦那さまはお休みのとき、どんなところにお出かけされているんですか？ 私と一緒に行ってみたいんです」

これも友人の受け売りなのですが、いきなりお出かけ先を考えさせようとしても、思いつかないだろう、と。

それなら、ある程度、行きたいところ、やりたいことなどの情報を与えて、その中から選択させたほうが、考えやすくなって良いのだそうです。

とはいえ、私もあまり外出に慣れていないので、なにがあるのかほとんど知りません。夫は時々休日に出かけているので、夫が良く行く場所などを見てみたいな、という軽い気持ちで言ってみたのですが、意外にも夫は激しく動揺しました。

無表情のまま、手に持っていたお酒の入った杯を取り落とし、大きく首を振っています。

え、何ですか、その反応？
もしかして。

「……一緒に行けないようなところに行っているんですか？」

思わず半眼になってしまったのは仕方ないと思います。

ええ、私はあれよあれよと気が付けば式も無く書類上結婚していたので、実際のところは形ばかりの妻ですし？ 健全な男性であるう夫が、口に出して言うにははばかれるような場所に行っていたとしても、私がとやかく言う筋合いじゃないとは思いますよ？

でも、こういうあからさまな反応ってどうなんですか？

私の声の低さに、なにを考えているのか察したらしい夫が、濡れ衣だ！ とばかりに焦った表情を浮かべてさらに激しく首を振っています。

どうしてでしょう。

とっても必死で、その分だけ白々しく見えます。

「いえ、やっぱりいいです。何かおいしいものが食べられるお店と、この中のどれか集会に連れて行ってもらえませんか？」

ええ、男性にとって女性を伴って出かけるには差しさわ리があるようなお店はいろいろとありますものね。でもそんなところに連れて行かれても、正直私にとっては居心地が悪いこと間違いなしです。先ほと言ったことは早々に撤回して、代わりに別の提案をすると、夫は額に手を突いて、がっくりと頂垂れました。

「……誤解だ」

搾り出すような低い声に背筋が伸びますが、私はふい、と視線を

逸りました。なんだか、気分がちょっと悪いです。やっぱり、物置部屋を片付けておいたほうがいいかも、と物置部屋に視線を向けると、夫が大きな音を立てて杯を置きました。弾みで夫の方を見ると、手の隙間から、夫が睨んでいます。

「わかった、明日、一緒に連れて行く。うまい店と、集会。それでいいか」

「・・・は、はい」

その視線がとても厳しく、いつに無く長く話した夫に驚きながらも、お出かけの予定が決まったようです。正直、ものすごく気が進まなくなっていたのですが、夫の迫力に押されて頷いていました。

とりあえず、計画は成功、なのでしょうか？

・・・後日、友人にこの日のことを話したら、爆笑されました。

11 夫を襲直します。計画を実行させましょう？

昨夜のやり取りを引きずっているのか、朝から不機嫌な夫は、やっぱり一番上に置いておいた服を着てきました。

今日はどういう場所に連れて行かれるのか良くわからなかったのですが、一応、私が選んだ服を置いておいたので、それを着ています。

薄い水色のシャツと、ボタンが銀色の濃紺の上着、黒のスボン。ちよつとまじめで堅そうな感じが出るようにしてみました。私の服装も、それにあわせて少し良い余所行きの服にしてあります。

本当は、活動的で簡単な服にしようかと思っていたのですが、夫がこれから行くであろう場所を思うと、少しでもとつきにくい感じがしたほうがいいのかも、という小ズルイ考えの結果です。ええ、ささやかな自衛手段ですとも。

夫は無表情で私を馬車に乗せると、すぐに出発しました。

まだ午前中の早い時間帯ですから、いきなり女性が行きにくい場所には行かないだろう、と思っていたのですが、夫が馬車を進めたのは、街のいわゆるそういうお店が軒を重ねる繁華街通りでした。

ええっ！？ 朝っぱらからこういうところに行くんですかっ！？

ドン引きしながら隣に座っている夫を盗み見ますが、夫はいつものどりの無表情で馬車を操っています。

それを見ていたら、なんだか夕べの腹立ちが蘇ってきました。

いいでしょう、この勝負受けてたつてやろうじゃないですか！
どんな状況になっても笑顔で受け流して見せます。ええ、いつも夫
がお世話になっております、位のことはいつてやろうじゃないです
か！

憤然として前を睨みつけていると、繁華街を通り過ぎました。

・・・あれ？　ここのお店に行くんじゃないんですか？

戸惑って夫を見ると、呆れたような夫の視線と行き会いました。
だから誤解だといっただろう、と目で言われているような気がします。
す。

ま、まあ、普通に考えて、仮にも妻を連れてこういうお店には行
きませんよね。普段一人で行っていたとしても、連れて行けといわ
れたからって、まさか妻を連れて行くわけにも行きませんよね。お
店にも迷惑をかけますし。

ちよつと冷静になって考えればわかるのに。自分で思っていた以
上に頭に来ていたみたいです。

大きく吐いたため息をどう思ったのか、夫はとても嫌そうな顔を
した気がしますが、実際には、前を見たまま馬車を走らせているの
で良く見えませんでした。

しばらくすると、夫はひとつの建物に馬車を寄せて止めました。

ここは、何のお店でしょうか？

夫の手を借りて馬車から降りて、店の外観を眺めます。お店、で
すよね？　特に看板は出ていないのですが、全体的な建物の造りが
食堂や雑貨屋などと同じような気がします。

夫に促されて中に入ってすぐに感じたのは、熱気でした。

思わず横を歩いていた夫にしがみつくと、なだめるように背中をなでられます。

広々とした室内では、男女合わせて約10数名が体を鍛えていました。

わかりました。ここ、鍛錬所、です。

まだ夫と出会う前に、保護者が言っていました。

この領内では有志による自警団が編制されていて、有事の際には領内の取り締まりを行う警領士と協力して対応しているのだとか。警領士が来るまで間に合わないような時には自衛の範囲での武力行使も認められていると聞いた覚えがあります。

そんな自警団の構成員が時間を見つけて鍛錬を行い、時には一般人へ護身術などの指導を行う場所をとして、各地に鍛錬所を設けているのだそうです。

初めて来ましたが、ここがたぶんその鍛錬所なのでしょう。

ということは、夫も自警団の一員だったんですね。

たいてい夕飯前には帰ってきますし、特に遅くなったりしないので、気づきませんでした。そういえば、お休みの午前中は時々出かけていると思ったのですが、鍛錬に来ていたのでしょうか。

「よお、珍しいな。同伴者か？」

「見学だ」

きよろきよろしていると、何か重そうなものを上げ下げしていた男性が夫に声をかけてきました。普通に会話を交わしています。夫の方は口数が少ないのですが、男性がいろいろ話しかけているので、

会話がきちんと成り立っています。

ちょっと、意外でした。

もちろん、夫も外で仕事をしているのですから、最低限の社会性は身に着けているだろうとは思っていたのですが、外だと、こんなに会話が弾むものですね。

そうこうしているうちに、ほかに鍛錬を行っていた人たちが何人か集まってきた、巡回や訓練、鍛錬についてあれこれ夫と話をしていきます。

私は邪魔にならないように、脇に置かれた椅子で休んでいたのですが、時々周りの方から投げられる、あれ？　なんでこんな子がここにいるの？　という不思議そうな視線が突き刺さって非常に居心地が悪いです。でも、もちろん笑顔でかわしますけどね！　直接話しかけられないので、静かに夫の話が終わるのを待ちます。

が、一向に話が終わる気配がありません。しかも夫は他の方と話をしながら、そのまま中庭へと出て行ってしまいました。

・・・もしかして、私、忘れられています？

夫を躰直します。計画を実行させましょう。？

仕方ないので、夫の出て行った中庭の方へ行くと、そこも広々とした屋外鍛錬所になっていて、夫が何か組手のようなものを実演しているところでした。

ああ、やっぱり今日の服は失敗でしたね。

上着の肩のあたりがとても邪魔そうです。

これなら、簡単な方の服にしてあげればよかったな、と思いつつ、今朝の心理状態ではそれも無理な話なので、仕方ないということにしておきましょう。

それにしても、動きがきれいです。

他の方たちの動きもとても機敏なのですが、夫のそれは機敏さとともにしなやかさがあり、舞っているようにさえ見えます。

あの足さばき、私がやったら、あつという間に転びますね。

夫とそれを囲む人々の様子を見ると、どうやら、夫はこの鍛錬所でも指導者の類に入るようです。汗をかきながら、熱心にああでもない、こうでもないと実演してみせる夫は、とてもいきいきとしています。

知らなかった夫の一面を盗み見ているようで、ちょっと気恥ずかしくなってきました。

夫はかなり汗をかいているようですし、お水でももらって来ましょうか。

顔に集まってきた熱を散らすついでに水を取りに室内に戻ろうと振り向いた先、私のすぐ真後ろに人が立っていたのに気づいて、思わず飛びずさってしまいました。

見上げると、先ほど夫に最初に話しかけていた男性が立っています。明るい茶色の髪に、緑の瞳。その瞳がどこか面白そうにこちらを見ていました。

「エーファにつかまっちゃったから、もうしばらく時間がかかるよ。ここでは女性も鍛錬に参加できるし、せっかくだから何かやってみないか？」

エーファ、という女性の名前に反応して夫の方を振り向くと、背の高い女性と体さばきについて話をしているところのようでした。なるほど、ここは女性にも開放されている施設ですから、ある意味出会いの場にもなりますね。覚えておきましょう。

「私、運動の類は苦手なので。見るのは好きなんですけどね」

そもそも、今の私は運動できるような恰好じゃないですし。丁重にお断りすると、相手も本気で誘っていたわけではないようで、あっさりと引いてしげしげと観察されました。

なんでしょう、なんだか珍しい生き物を眺めるように見られている気がします。

「なあ、間違ってたら悪いんだが、あんた、あいつの女房だよな？」
「・・・つけ、見学者です！」

直球で尋ねられて、しまった！ と思いました。

そういえば、夫と私が結婚したことは、ほとんど知られていないはずです。夫から直接紹介を受けたのは、二人だけです。つまり、

それ以外の人々は、私の存在を知らない可能性があることを、すっかり頭から抜け落ちてしまっていました。これは、明らかに失敗です！

だって、もし夫が私の存在を公にしていなければ、未来の奥さまに余計な心配をかけずに済みますし、離縁した後には夫が周囲からあれこれ言われるのを避けることができます。

それもあってこれまでずっと、夫の私的な集まりには極力顔を出さないようにしていたというのに、すっかり忘れてしまっていました。

ということは、集会への参加もダメじゃないですか！

夕べ夫に約束してもらいましたが、参加する集会は私が選んだ方がいいですね。確か、偽名と仮面で参加できる集会があったはず。そんなものすごく怪しい集会、誰が行くんだろうと思った記憶があるので、間違いありません。でもまさか、自分が行きたいと思うことになるとは。

ああ、それにしても、ここに来たのは間違いでした。

いつもと違う夫の様子を見れたのはよかったのですが、長居は無用です。まだ妻とは知られていませんから、ここはひとつ、さっさと出てしましましょう！

「私、お先に失礼しますね」

話をしていた男性に断って、素早く建物の外へ出ると、だいぶ陽が高くなっていました。

夫のほうはまだまだ時間がかかりそうですし、馬車の中で待つて

いましょう。あとでこれからの予定を聞いて、夫の知人が多そうな場所なら変更してもらわなくては。

小さくため息をついて馬車に乗り込もうと、段に足をかけた瞬間、後ろから強く腕を引かれて足が宙に浮きました。

頭から倒れていく感覚に、心臓が止まりそうになりましたが、しっかりと抱き止めてくれた腕のおかげで、倒れずにすんだようです。というか、その腕がなければ転ばなかったんですね！

きつ、と犯人を睨みつけると、少し息のあがった夫がそこにいました。

予想通りの犯人です。

「そんな風に引つ張ったら、危ないです」

至極もつともなことを抗議すると、夫は太い眉をギュツと寄せました。

「どこへ？」

「馬車の中で待っていていようかと。もうよろしいんですか？」

鞆からハンカチを出して夫の額と首筋に流れる汗を軽く拭き取ります。夫はちよつと待っている、というような仕草をして私をきちんと立たせてくれました。鍛錬所の中に入っていたかと思うと、すぐに出てきます。あ、上着を取ってきたんですね。

まだ汗をかいている夫を見上げて、私は鞆の中から、夫の替えのシャツを取り出してハンカチと一緒に渡しました。

夫はシャツの替えを不思議そうに眺めています。なんでこんなものが鞆の中から出てくるんだろう？　って思ってますよね。残念な

がら、回答は教えてあげません。

「そのままだと、風邪ひきますよ？　ちゃんと汗を拭いて、着替えてくださいね」

有無を言わず夫を馬車の中に押し込んで、着替えさせました。
実は鞆の中には、私の分の上着とスカートの替えも入っています。

・・・よくないお店で私が大暴れするのを想定して持ってきていたことは、内緒です。

夫を躰直します。計画を実行させましょう。？

着替えていくらかさっぱりした夫が昼食に連れて行ってくれた場所は、友人が連れて行ってくれるような小洒落たお店ではなく、『質より量！ 安くて旨けりや文句ねえだろ！』と看板に書いてあるお店でした。

店に入る前から、心臓を打ち抜かれました。
なんて素敵なお店でしょう。

そして店内はある意味予想通り雑然としていて、ほとんどが男性で、とにかく一生懸命ご飯をかつ込んでいます。
おしゃべりを楽しむとか、ゆっくりするとかそういう感じではなく、食べたらずくに席を空ける！ というのが暗黙の決まりことのようなのです。

どこまでも男気にあふれたお店です。

店主はどんな方なのでしょう？ ちょっと見てみたい気がします。

それに、ここなら夫の知り合いがいたとしても、おしゃべりするような環境でもないですし、皆さん脇目も振らずに食べているので、大丈夫でしょう。

空いている席に隣り合って座り、夫が慣れた様子でいくつかの料理を注文しています。内容を聞くに、私の分も注文してくれているようです。周りを見回して気づいたのですが、皆さん座つてすぐに注文しているところを見ると、常連さんばかりのお店です。

ということは、夫も常連さん、なわけですよ。

朝ごはんとお昼ご飯、やっぱり足りなかったのでしょうか？

家に帰るまでに合間に、ここで腹ごしらえをするのが習慣になっていたのなら、夫の常連のような慣れた感じにも納得がいきます。

夫に実際のところを聞いてみようとする前に、目の前に「どん！」と料理が置かれました。「どん！」です。器を置いた音もさることながら、見た目がもう、「どん！」という感じです。

すごい。

私の頭よりも大きな器に、魚や肉、野菜、キノコなど、ざっと数えても20種以上の食材が大胆に煮込まれた料理です。

繊細さのかけらも無い、男らしい大雑把な料理です。

夫と二人で食べるにしても食べきれるか不安な量なんです、さすが、看板に偽りなしですね。

感心している私の前にも同じようなものがもう一つ、「どんっ！」と置かれました。

え。ちょっとまってください。どうして私の前にも器があるんですか。

こんなに食べられませんよ、私！？

何かの間違いじゃないか、と思って反射的に器を置いたお店の人を見ると、収穫前の小麦のような金髪と金色のヒゲが目に入りました。夫がクマさんなら、この男性は獅子でしょうか。夫以上に厳つい顔を半分以上ヒゲで隠した筋骨隆々な男性が、まっすぐに私を見下ろしています。

えーと。たぶん、いや、かなりの高確率で、店主、ですよ？
そして、その目は、俺のメシが食べねえのか、ですね？

いや、でもいくらなんでもこの量を食べるのは物理的に無理というか、私の場合、夫の料理をちよつとつまませてもらえればそれで十分というか・・・はい、その視線は、つべこべ言わずに食べつ！ですね？

私の友人もさることながら、夫の知り合いの方もどうして視線だけで会話するのでしょうか！？ 夫が無口なのは、もしかしてそのせいですか？

動揺して夫を見上げると、夫は予想していたかのように私を見ていて、小さく頷きました。どうやら、無理無理、という私の視線の意味を理解してくれたようです。

「がんばれ」

・・・全然理解していませんでした。

夫からの声援を受けて、自分の顔よりも大きな器を持てあましなからも、この店のどの男性よりも一生懸命食べました！

「おお、いい喰いっぷりじゃねえか、なあ？」

途中で店主らしき男性が豪快に笑っているのが聞こえた気がしますが、そんなの気にしていられませんと！

この「豪快！男の料理！」は見た目の適当さを裏切って、とても味わい深く、かなり食が進んだのですが、それでも奮闘むなく半分近く残ってしまいました。

もう一口だつて入りません。

これ、器を借りてお持ち帰りしちゃダメでしょうか？ 美味しいだけに、残すのがとってももったいないです。

未練がましく器をつつきながら、夫の方を見てみると、もうとくに食べ終わっていたようで、きれいに空になった器越しに、店主らしき男性と話をしていました。

店内を見回すと、あれほどごった返していた店内が嘘のように人氣が少なくなっています。

夫は私が限界なのを見て取ったのか、残りをきれいに食べてくれました。

空っぽになった二つの器。
それを見て、確信しました。

・・・普段のご飯、絶対足りてませんよね？

夫を躰直します。計画を実行させましょう。？

忙しい時間帯が過ぎたのか、店主は私と夫に飲み物を出して、少しおしゃべりをしました。

男気あふれる素敵な獅子店主は、夫と同じく自警団に所属しているのだそうです。ちらりと見えた厨房には、太い棍棒と、たぶん私には持ち上げられないほど大きな斧が置かれていました。うん、店主の見た目を裏切らない武器です。

それにしても、この方と夫は、鍛錬所でみた他の自警団の方とはちよつと雰囲気が違うような気が。あえて言えば、友人の元夫と、先ほど鍛錬所で声をかけてきた男性ですが、鍛えている、というか、鍛え抜かれていますよね？

この街はそれほど治安が悪いという話は聞かないのですが、皆さん、実戦経験があるのは間違いなさそうです。

夫の腕や足にいくつか傷跡があるのは気づいていましたし、この店主にしてもヒゲでうまく隠れています。頬に傷が走っていますし。

この街の出身ではないのでしょうか？

聞いてみたい気がしましたが、かなり私的な部分にまで踏み込むことになりそうだったので、やめておきました。誰しも、どこかしらに地雷を抱えているといいますしね。

その代わり、料理法や調味料についていろいろ話を聞かせてもらいましたよ。

とくに変った調味料は使っていないのに、あの独特の味わいはどこから来ているのか、ずばり聞いてみると、店主は豪快に笑い、ずばり答えてくれました。

「適当だ！」

・・・素敵すぎです、店主さま！

夫と連れ立って店を出るときには、可愛い焼き菓子まで持たせてくれました。

今はのどの辺りまで料理が詰まっている感じがしますが、これなら後でゆっくり食べられますね！

馬車の上でちょっと焼き菓子の包みを解いてみると、可愛い猫の形をしていました。よくよく見ると、焼き菓子の包みも薄桃色の紐でリボンが作られています。

意外すぎて固まってしまいました。

あの店主さまの大きな手で、こんな繊細なことができるものなのでしょうか？

「それは、ヴォルフの妻の焼き菓子だ」

「あ、ですよね。今一瞬、すごく微妙な想像しちゃいました」

私がつっぱど微妙な顔をしていたのか、珍しく夫の方から話しかけてくれました。

店主さまはヴォルフというお名前なんですね。

重量級の斧が似合う手で、白いレースの前掛けをかけて、小さな焼き菓子の型に悪戦苦闘する獅子店主さま。
想像すると、ちょっと可愛いんです。

思わず笑ってしまうと、夫が不思議そうにしていたので、たった今した想像を細かく教えてあげました。教えると同時に、とっても嫌そうな顔になりましたが。

「あれ、駄目ですか？　なかなか可愛らしいと思うんですが」
「感性がおかしい」

一言の元に、ばつさり切り捨てられました。
普段口数が少ない夫だけに、その威力はすさまじく、私の胸を見事にえぐります。

半分涙目になりながら、どこがどう可愛らしいのかについて熱弁しましたが、夫の同意はかけらも得られることなく、感性がおかしい判定を覆すどころか、確実なものにただけでした。

・・・無念です。

夫を躰直します。計画を実行させましょう。？

夫に感性を完全否定されてやさぐれていた私は、ふと、気がつき
ました。

そういえば。

すっかり忘れてしまっていたのですが、店主さまは自警団の一員、
つまりは、夫の友人ですよ？

夫の私的な交友関係に顔を出さない計画、いきなり挫折してるじ
やないですか！

また夫の友人に顔を知られてしまったことに、どつぷりと落ち込
みそうになったのですが、すぐに浮上しました。

夫と店主さま、店主さまと私の会話を思い出してみましたが、ど
こにも夫婦関係を思わせる単語はありませんでした！

これなら、親戚とか、同僚とか、いくらでも誤魔化しようはあり
ます。よっしゃっ！

「旦那さま、これからどこへ行くんですか？」

同じ失敗は二度繰り返すわけには行きません。いえ、もう二度繰
り返してしまっただのですが、でも、三度目はありませんよ！ ええ、
ありませんとも！

そのためにも、夫のこれからの行動予定を確認します。夫は迷う
様子もなくどこかへ馬車を走らせているので、目的地は決めてある

のだろうな、と予想したのですが、やはり決まっていたようです。

「集会へ」

「ど、どの集会でしょうか!？」

夕べのやり取りの通り、夫は集会に連れて行ってくれるようで、それはとても嬉しいのですが、なぜか非常に嫌な予感があります。できれば、あまり夫の私的な関係とは無縁の集会でお願いします、と心の中で懇願しました。そして、懇願してから気づきました。夫になにか心の中でお願い事すると、真逆のことが起きる可能性が高い気がします。

「自警団」

「帰りましょう!」

案の定な夫の回答に、思わず叫んでしまいました。

いや、だって、自警団の集会になんて参加してしまったら、周りは夫の知り合いだらけじゃないですか! 店主さまのようにごまかせる会話のほうが珍しいのであって、普通はそちらは? 的な会話が入ることは間違いありません。

ああ、でもせっかく仕事以外では引き籠もり気味の夫が外出の予定をたててくれたのに、それを無にするのは勿体無さ過ぎます。とはいえ、夫婦として参加するのは、本来の計画の趣旨に反するので、絶対駄目です。どうすればいいでしょうか。

夫の怪訝な視線が痛いです。

そうですね、集会に行きたいって言ったのは私ですものね。でも、女心と秋の空は移ろいやすいものだといいますし、ここはひと

つ、女心の複雑さに触れてもらうことにしましょう！

「い、いえ、あの、帰るんじゃないくて、もうちょっと違う集会というか、たまにはいつもと違う方たちと交流してみてはいかがでしょうか！？」

く、苦しい。

自分で言っても苦しいのは良くわかっています。でも、他に良い言い回しが思いつきません。

ああ、夫の視線がさらに厳しくなってきました。
行きたいって言ったり、行きたくないって言ったり、別のところに連れて行けって言ったり、ただけ我侭なんだって感じですよ、ごめんなさい、わかってます、わかってるんですけど、他にどういえばいいのかわからないんです！

一人で混乱の極みに達していると、夫が馬車を止めました。
本格的に叱られてしまうのでしょうか？　これまで見たことも無いほど、厳しい目で夫が私を見ています。

伸ばされた手に怯えて目を瞑ってしまったのは、仕方ありません。

夫の暖かな手のひらが頬にそつと触れました。

「誰だ？」

「・・・え？」

怒気を無理やり押さえ込んだような低い声と、優しく頬をなでる手の温度差に驚いて目を開けると、怒りに目を細め、殺気立っている夫がいて気が遠くなりそうでした。なんとか持ちこたえて夫を見つめ返すと、さらに夫の目に酷薄な色が浮かんでいます。

「誰に、なにを言われた？」

だれに？ なにを？

とっさに脳裏に浮かび上がったのは、白、でした。

・・・神官服の、汚らわしいまでの白さ。

私は手の平に感じた痛みにはっとなって、とっさに首を振って浮かんだその白を打ち消しました。

いいえ、違います。

夫が、知っているはずがありません。

だから、夫が言っているのは、別のこと。

そう。これは夫だけでなく、私の天敵ですら、知るはずが無いことなのですから。

いつの間にか両手を硬く握り締めていて、自分の爪で手の平を傷つけてしまったようです。地味な痛みですが、それが私を落ち着かせてくれました。

「えーと。なんのことですか？」

「鍛錬所で。フィリウスか？」

私は急いで夫との会話を頭のなかで客観的に再現してみました。

集会に出たいといっていたのに、自警団の集会だと知った途端に帰りがたがる。さらに、知人のいない集会への参加を勧めてくる。つまり、鍛錬所で見学に行ったときに、誰かに嫌なことを言われたと予想した？

そんなことがあるわけが、と否定しかけて、気づきました。そういえば、私、夫の知り合いの方に話しかけられている最中に中座して外へ出てしまったんでしたっけ。

私としては妻だと知られなくなっただけなのですが、客観的に見たら、何か嫌なことがあって、席を外したようにも見えなくも無いかも知れません。

ということは、フィリウスというのは、あの話しかけてきた男性の名前でしょうか。

「いえ！ 誰になにを言われたわけじゃなく、」

夫のこの激しい怒りの矛先が、無実の男性に向かっていると思いとつさに否定してから、ふと、気がつきました。

え。ということは、じゃ、もしかして。

私のために、怒ってくれているんですか？

「・・・旦那さま」

感動のあまり、思わずつぶやいて、頬に触れるとても暖かくて大きな手に自分の手を重ねました。

暖かい、とっても、暖かいです。

「ありがとうございます、旦那さま」

夫の厳しい視線の中に私を気遣う色が浮かんでいるのに気づいて、とても嬉しくて、少し悲しくて、ちよつと泣きたくなりました。

夫は、ふと眉を寄せ、反対の手で私の手を取って目を見開きまし

た。

「血が」

「そうなんです、怪我しちゃいました。だから、帰りましょう？
旦那さま」

夫の知人たちに紹介されるわけには行かない、というのもありますが、今はとにかく、見知らぬ大勢の中にも、二人でゆっくり過ごしたい気分です。

夫は、私の我侭を何も言わずに叶えてくれました。

・・・離縁の 때가、近づいています。

11 反省します。

ただいま私、絶賛、反省中です。

夫は今日一日出かけていて夜まで帰って来ないそうですし、友人もお店が忙しいとかでしばらく来れないといていたので、一人静かに反省するにはぴったりの状況です。

夫と一緒に外かけてから、いろいろ考えすぎて少し気分が落ち込んでしまっていたので、これを機に一人反省会を開催します。

これまでのことをゆっくり振り返りながら反省していたら、私、気づいちゃいました。

よくよく考えてみると、私の『現妻による、未来の妻のための、夫の再教育計画』って、もうすでに目標達成で終了してました！

もともと、未来の奥様のために、夫の無い無い尽くしを改善しよう！ということから始めた計画なのですが、挨拶をさせよう計画とお話をさせよう計画が達成できているので、すでに夫は無い無い尽くしじゃないんですね。

夫は出無精でも人付き合いが皆無なわけでもない事も分かりましたし、なんだかんだで毎晩欠かさずヒゲを剃っているところをみると、無精という訳でもないようですし。

本当は、次なる奥さま候補と出会えそうな集まりに夫を引っ張り回そうと思っていたのですが、私は一緒に行けない事がない先日の

お出掛けで判明したので、これは頓挫しました。

夫の通う鍛錬所もひとつの出会いの場になりそうですし、自警団に所属しているなら見回りなどもありますから、むしろ自然な出会いがあちこちにありそうな気がします。

ということは、もう私が未来の奥さまの為にできることって、もうないんですね。

それに、夫を襲おう！ と決めてから夫のことを注意深く観察するようになって、気付いた事もあります。

実は、夫はかなりの気遣いさんだったみたいなんです。ごくごく自然に、あまりにもさりげなく気遣いや優しさを発揮しているので、なかなか気付けませんでした。

というか、さりげなさすぎて、気がつけないくらいのさりげなさって、どんだけ上級者仕様なんですか。相手に気づいてもらえないから、夫的には損をしているように思うのですが、そこに無頓着なのが夫らしいです。

でも、一度気付けばすぐに分かるようになると思うので、きっと未来の奥様も気付いた時に感動するに違いありません。ちなみに私は物凄く感動しました。

こうやって思い返してみると、最近の計画は、わたしの願望が優先されているようなものばかりでしたね。

たとえば、『さわやか夫計画』とか。

・・・正直に言います。

この計画は、夫が髪を切ってヒゲを剃ったどうなるのかを見たい、というだけで決めた計画でした。

結果、夫は三割増しで野生化してしまって、自分の首を絞めることになってしまいました。

『夜更かし夫の早寝計画』は、言い訳の余地なしの完全なる八つ当たりでした。

あれ以来、夫は私よりも先に奥側で寝るようにしてくれています。でも、朝起きると必ず私が奥側で寝ているということは、夫は夜中に起きだして活動しているのかも知れません。そんな気はしていたのですが、寝るときに夫が居ることが嬉しくて、そのままにしています。

『夫の出無精改善計画』は、よく考えたら、夫はもとも出無精じゃないっていうまさかの落ちです。

だって、自警団は有志の集まりとはいえ、巡回の担当だってありますし、鍛錬所での訓練もありますから、一人のときなら夫は積極的に外に出ていると思います。むしろ、出無精は私ですよ。何度か夫に止められたからって、あえて街に出たいと主張しなかったのは、私です。

そして、ついこの前の『夫に外出の予定をたててもらおう！計画』にいたっては、私の我侭全開でした。

この計画、簡単に言うと、「私をどこかに連れてって！」ってことです。これも正直に言えば、毎月恒例のお茶会への送り迎え以外で、夫と一緒に出かけしてみたかったです。

本当はわかっているながら、それに気づかない振りをして計画を実行に移していたのは、私の願望がぎっしり詰まった代物だったからです。

結婚してから、どんどん無い無い尽くしになっていく夫を何とか

したい。だけど、自分から動くこともためらわれて。だから、『現妻による、未来の妻のための、夫の再教育計画』という名目を掲げて、いろいろ我俣を実行してしまいました。

夫が挨拶をしてくれるのが嬉しくて、会話をしてくれるという喜びをかみ締めて、氣遣ってもらえるのが幸せで、もっと、もっとと欲張ってしまいました。

本当に、先のことなんてわからないものですよ。

いざ夫との離縁を決意したら、決意したからこそ最後に悪あがきがしたくなって、あがいたらさらに欲張りになるなんて。

でも、それも、今日までです。

これ以上、夫に甘えるわけにはいきません。私のいろいろな決心が鈍ってしまいますし。

『脱・無い無い尽くし』を果たした夫は、今のままできつと未来の奥さまと、十分円満な夫婦生活がおくれると思います。ということとは、あとは私だけなんですよね。

予定よりもちょっと早いですが、早速、今日から始めましょう。

・・・離縁の手続き、開始です。

12 お別れです。？

いざ離縁の手続きをしよう、と思つたら、すぐに準備が出来てしまいました。

手続きに必要な書類は、先日のお茶会の人に友人が全て揃えてくれましたし、夫の居ない時間を見つけて少しずつ記入しておいたので、抜け漏れがないかどうかを確認するだけです。

念のため、書類と一緒に隠していた覚書に書き付けていたことを照らし合わせながら、書類に不備が無いかを確認してみました。うん、必要書類は全部揃っていますし、記入漏れありません。

完璧です！

それから、仲人でもある保護者と奥方さまに向けて書をしたため、神殿への結婚宣誓書の破棄依頼も作成しました。それから、もう一通。

これで必要なものはすべて揃いました。

あとは、これらの書類をいつ提出しに行くか、です。

今日は午前いっぱいを一人反省会を開催して過ごしてしまったので、時間がたりないかもしれないかもしれません、明日にしたほうが・・・。
いえ、やっぱり、だめです。こういうのは勢いが大切ですから、今日中に出来るとまでやってしましましょう！

夫が馬で出かけているので馬車は使えませんが、街までの道のりはわかっていますし、歩けない距離でもありません。夫が帰ってくる前に家に戻っておきたいので、時間は限られてしまいますが、少

しは進められるはずです。

よし！ 行きましょう！

手続きが終わらない覚悟で出かけた、その結果。

あっさりと、すべての手続きが終了してしまいました。

・・・あれ？

友人と一緒に回っていたときは、丸一日かけても終わらないかも、と戦々恐々としていたのを覚えているのですが、こんな半日以下の時間であっさり終わるものでしたでしょうか？ 今、まだ陽が高いですよ？

確かに友人と下見をしたときも食事後に移動したので、午後をだいぶ回つてはいましたし、正直、友人に説明して貰っている時はいろいろなことを一度に覚えようと必死だったので、時間の感覚に自信が無いんですね。

念のため、覚書を確認してみますが、お役所の処理上、完全に反映されるのは明日の朝になるようですが、流れに間違いはなさそうです。

つまり事実上、離縁が成立した、ということですよ。

・・・なんだか、あっけないもののですね。

離縁の際には、どちらか一方だけの署名でも成立しますので、夫に書類を渡す必要ありませんでしたし。

結婚したときも書類だけだったので、たしか半日もかからなかったと記憶しています。同じような手順なのかもしれませんね。

縁組も離縁も、こんなにも簡単なのかと思うと、少しだけ、さびしいような、複雑な気持ちになってしまいます。

この流れで、ある意味一番の難関である保護者夫妻への報告も今日中にやってしまおうか、とも思ったのですが、やめておきました。こちらでは手紙を出してそれが届いた頃に訪ねて報告する、事後報告の形が正式なやり方だそうなので、まだ数日の猶予がありますから。後でできることは後にしましょう。

ということとは。

あと今日やるべきことは、夫と話すことだけですね。

離縁の手続きを終えて、家への帰り道を歩きながら、いろいろなことを考えました。

これまでのこと、これからのこと。

・・・話せること、話せないこと。

考えこみながら無心で足を動かしたおかげか、行きよりも早く家に着きました。まだ陽は傾いていません。

既舎を覗くと、まだ馬は戻ってきていませんでした。よし、夫はまだ帰ってきていないようですね。

少し迷ってから家の中に入り、いつも通り簡単な夕食の支度をしました。

それから、物置部屋から数少ない私物を鞆に詰め込んで外に出ます。さすがに家の中で夫を待つ気にはなれませんが、外の雨除けにある椅子に腰掛けて夫の帰りを待つことにしました。

どれくらいそうして座っていたでしょうか。

太陽がどんどん傾いて、沈む頃。遠くから蹄の音が聞こえてきま

した。

立ち上がって出迎えると、乗馬した夫が夕陽を背に受けながらゆつくりとこちらへ向かってきます。

逆光で夫の表情は見えませんが、馬と夫の影が、夕陽と映えて、一枚の絵のようです。

夫が私の前まで来ると夕陽が沈み切り、夫の顔がよく見えるようになりました。

焦げ茶色の瞳が私を映し出しています。

とくり、と鼓動が大きく打ち始める音。

自分の体の中から響くその音に、ああ、やっぱり、と嬉しいような、くすぐったいような、不思議な気持ちになりました。

馬から降りた夫がいつも通りの無表情で私を見下ろすと、すつ、と目を細めました。

小さくいなないた馬が夫に何かを訴えかけるように頭を振り、夫の視線が動いて私の足元においていた鞆に注がれます。その視線がゆつくりと私に戻ってきました。

「・・・どこへ？」

こうやって夫と話すのもこれが最後になるのかも知れませんが、そう思うと目がつるんできてしまいますが、何度も瞬きをして散らします。

泣いている場合じゃ、ないですから。夫に話せることを、きちんと伝えておかなくては。

「今日、離縁の手続きをしてきました。全て受理されましたので、ここを出て行きます」

悲壮感と覚悟を胸に、なんの感情も浮かんでいない夫の焦げ茶色の瞳をまっすぐに見つめ、まず最初にそう夫に伝えたのですが、どうやらそれは失敗だったようです。

・・・夫の瞳に浮かんだのは、いまだかつて見たことがないほど激しい、感情の渦でした。

お別れです。？

焦げ茶色の目に、これまで見たこともない苛烈な色を浮かべた夫の視線に、どっと冷や汗が流れてきました。

な、なんでしょう、この圧迫感。

普段は何の感情も浮かべていないか、ちょっと不思議そうにする程度の瞳に、これほど激しい感情が浮かぶと、こんなにも威圧されるものだったんですね。

思わず一步下がりがかけた体をとっさに意思の力で抑えられたのは、夫との日々鍛えられた賜物に相違ありません。

夫を刺激するような行動は一切禁止！ と、私の本能がそう訴えかけてきます。これも夫に鍛えられたものですから、間違いありません。

それでもなんとか話をしようと、口を開こうとするのですが、私を見下ろす夫の迫力にすくんでしまって、呼吸すら乱れてきました。

「・・・離縁？　ここを、出て行く？」

「・・・あ・・・は、はい」

もうこのまま声が出せないのかも、と思い始めた頃、夫の低い声でつぶやかれた言葉に返事をしなければ！ という危機感から、ようやく声が出せました。

い、今です！　今を逃したら、また声が出せなくなってしまふ可能性があります！

「これまで、お世話になりました。二人で生活できて、楽しかったです。本当にありがとうございます。どうか、これからもお元気で」

いいながら、なんて中身の無い、と齒噛みしてしまいました。さつきまで言いたいことをたくさん思い浮かべていたというのに、いざとなると、うまく言葉をまとめられません。夫への感謝も、今後を祈る気持ちも、こんな言葉では全然足りないのですが、他になんと言っていいのかわからないのが、ひどくもどかしいです。

そのとき、夫からの無言の圧迫感が一気に増しました。

・・・か、顔を上げられません。

言葉と同時に頭を下げたので、夫の苛烈な視線を直視し続けることは避けられたのですが、見えなくても夫からの圧迫感が増え続けています。間違いなく、私に突き刺すような視線を注いでいます。

でも、いつまでもそうしているわけにもいきません。もう陽が落ちてしまいましたし、これから街まで歩くとなると、かなり暗くなってしまうすし。

私は意を決して顔を上げて、夫に話すべきことを話し、最後の別れの言葉を言おうと息を吸い込み。

そのまま、息の根がとまるかと思いました。

夫の口元に、小さな笑みが浮かんでいました。

以前に見た夫の笑みとは全く違う、凍えそうなほど冷たい笑み。

それでいて、目は混沌とした色を浮かべたまま、厳しく私を睨みずえていて、背筋に冷たい汗が流れていきます。

私と同じように、夫の気迫にあてられたのでしょうか。視界の隅で、怯えたように小さくいなないた馬が、そそくさと厩舎に向かって歩いていきました。しかも、いつの間にか私の鞆を咥えて。

え？

ちよつ、ちよつと待つてください、馬！ どうしていち早く逃げるんですか、馬！？ どうして私の鞆まで持つて行っちゃうんですか、馬！！

野生じゃないくせに、野生の勘ですか！？ 夫がいないときに餌をあげたりお世話をしてあげた恩を忘れたんですか！？

というか、ちゃんと自分で厩舎の扉を開けて中に入るなんて、どんだけお利口なんですか！？

あ、待つて！ せめて、私の鞆を返してください、うま、馬あつ！！

内心絶叫する私の目の前で、馬は完全に厩舎に入っただけでいってしまいました。しかも、後ろ足で器用に扉を蹴飛ばし、きっちりと閉めていきやがりましたよ、あのお利口馬。

ばったん、と情けない音を立てて閉まった扉を啞然とした見つめたまま、全身から一気に力が抜けていきました。

・・・なんでしょう、この、脱力感。

さっきまでの私の悲壮感は、覚悟は、一体どこへ消えてしまったのでしょうか。すっごく真面目に悩んで覚悟して、真剣に夫と対峙

していたはずなのに。馬め。どうしてくれるんですか、この微妙な雰囲気！？ 今更怒れる夫と対峙する勇気なんてチリほども残っていませんよっ！

全力で馬に、戻ってこい！ という念を送ってしまい、私の意識が他へ向いていることに気づいた夫が、さらに視線を厳しくします。その視線に耐え切れなくて思いっきり視線を背けてしまいました。

そ、そりや怒りますよね、でも私もまさかここで馬がそそくさと逃げ出すとは思っていなかったというか、声も出せないくらいに夫に威嚇されると思っていなくて覚悟ができていなかったんです、現実逃避したくなっちゃったんです。

深刻な場面で緊張感を根こそぎ破壊されてしまった脱力感になぜか敗北感まで加わって非常に打ちひしがれていたのですが、そうだとすると、怒れる夫の目の前で、現実逃避をするべきじゃありませんでした。

しかも、微妙な空気に耐えきれなくて、視線を外したままにしておくなんて、油断もいいところです。

あ、と思ったときには視界がぶれ、夫の肩に担ぎ上げられています。

「ちょ、ちょっ、まっ・・・！」

声を掛けようとして舌を噛みました。じ、地味に痛いっ。痛みをこらえるのに目を閉じたのがさらに失敗だったのか、気づいた時には寝台に横たわり、上から夫にのしかかられていました。

・・・この体勢は、いたい？

私、別に眠くて我俣を言っていたわけではないんですが、というか、どうして夫が真上から見下ろしているんでしょうか。うん？
真上？

これまで夫が私を寝台まで運んでくれた時は、部屋から出て行くか、そのまま隣で眠るかでした。

でも、今は、覆いかぶさるように夫の四肢で囲われていて、すぐ目の前に、夫の混沌とした瞳が。

あれ？

ちよつと待ってください。え、もしかして私。

・・・押し倒されて、ます？

自分の状態を正確に把握した途端、心臓が鼓動を打つことを拒否しました。

焦げ茶色の瞳が真っ直ぐに私を睨み付けていて、視線をそらすことが出来ません。燃え上がる瞳の中には惚けたような小さな私がい
ます。

陽炎のように揺らめく激しい熱が、熱くて身動き一つ自由にならず、呼吸さえも出来なくなつて。

このままこの溶けるほどに熱い視線に焼き殺されてしまうのでは、とちいさく身震いすると、その瞳がだんだんと近づいてきました。

なんて、きれいな。

溶けきつた頭で考えられたのは、それが最後でした。夫の柔らかで暖かな唇で私の唇が塞がれ、最後の息をうばわれた私は。

・ ・ ・ 人生二度目の、
気絶を体験しました。

お別れです。？

目が覚めたのは、朝日が昇る少し前でした。

夫は既に出かけた後だったようで、家の中はしんと静まりかえっています。

私が気絶してしまったあと、夫は寝ていなかったのでしょうか。それとも、根性で早起きしたのでしょうか。

無意識で自分の唇に手を当てていることに気づいて、一気に顔に熱が集まってきました。

どんどん熱を持ってくる頬を慌てて両手で叩き、寝台から起きました。

とにかく、水でも飲んで落ち着きましょう。

水を取りに台所に向かう途中、食卓に用意しておいた夫の夕飯が、少し残っているのに気づきました。

夫の分しか用意していなかったのですが、大きめのお皿に少しずつ取り分けられたそれは、ちょうど私がいつも座る席に寄せられています。

私の分、とっておいてくれたんですね。

くすぐったいような、鼻の奥がツン、と痛むような不思議な気分を味わいながら、夫が残しておいてくれた夕飯を朝食代わりにいただきました。

もつと、ちゃんと、お別れしたかったです。

結局、話したい、と思っていたことの100分の1も話せませんでしたね。

これまでのことも、これからのことも、夫に知っていてほしいと思っただけの全てが、全く伝えられませんでした。

でも、これでよかったのかもしれない。

面と向かって話をしたら、きっとまた何も話せないか、余計なことでまで話してしまいそうな気がしますし。

よくよく考えると、私たちって、本当に変わった夫婦でした。初めて会ったその日に結婚が決まって、一緒に暮らして。お互いのことをまったく知らないまま、手探りの日々。会話が無くなっていることに気づいたときは焦りましたが、今となってはいい思い出です。

お皿を片付けるついでに、せっかく時間があるので、家全体を念入りに掃除することにしました。

次の奥さまのためにも、私がいた痕跡は可能な限り消してしまおうと思ったのですが。

・・・私こんな所に私物隠してましたっけ？

やけにあちこちから私物が出て来るんですが。なくしたと思っていた櫛と髪を結うための紐が台所から出てきた時には驚きました。もともと、物持ちが良すぎているんな物をしまっておく癖はありますが、さすがにこれは無いような気がします。しかも全く記憶にないって。うん、反省しましょう。

ついでに、夫の筆筭の中から、馬に取られた鞆が出てきた時も、驚きました。何でこんなものがこんなところに？

その後は、それほど時間もかからずに家全体をこざっぱりと片付けることができました。整理したつもりでも、意外と私の居た痕跡があちこちに残っているものなんですね。片付ける時間があってよかったです。

なんとなく、家全体を見回します。こちらへ渡って来てから、一年ちよつと。その内のほとんどの時間をここで過ごしました。

去りがたい気持ちが無い訳ではありませんが、旅立ちの時です。

玄関から外に出て、扉をしっかりと閉めて鍵を掛け、厩舎の影に置いて置きました。何かあった時の鍵置き場として二人で決めていた場所です。厩舎を覗いてみたのですが、利口で薄情者な馬も夫と出かけていました。

ひとしきり家と厩舎を眺めた私は、こみ上げてくる何かをぐっと抑え、ひとつ頭を下げて、家に背を向けて歩き出しました。

まっすぐに前を睨みつけて、気持ちを切り替えます。

当初の目標通り、夫の無い無い尽くしを改善することが出来ました。

そして、リーフェリア祭の前に離縁しました。それどころか予定よりも、ひと月ほど余裕があります。

うん。どれも目標達成できたうえに、時間的な余裕があるなんて、幸先いいじゃないですか！ このままの勢いで、ほかの目標も全て達成させてしましましょう。

運気の流れはそのままに、気持ちは切り替えて頑張りますよ！

これから待つ、私の一世一代の大舞台、見事演じきってみせましよう！

・・・次なる目標は、黒のリーフェリア、『神の伴侶』就任です！

番外編：妻と夫のハロウィンパーティー？（前書き）

すみません。本編が間に合わなそうなので、季節ネタに走ることにしました。

時間軸は、全ての物語終了後ですので、本編ではチラツとしか出てきていない方もがつり出てきますが、あまり気にしない方向でお願いします（ぺこり）

番外編：妻と夫のハロウィンパーティー？

もうすぐ、ハロウィンというお祭の日なのだそうです。数日前に何かの話の流れで他国のお祭について聞いた時に夫が教えてくれました。

なんでも、かぼちゃのお化けが街を徘徊して、子どものお化けたちがお菓子をせびり、お菓子がないと不幸な目に合わされるのだとか。

・・・なんですか、そのホラー現象。

どの辺がお祭なんですか、死者のお祭ですか、生者はいつたいどうすればいいんですか！？

だって、想像してみてください。

巨大なかぼちゃのお化けが、ズルリ、ズルリ、と街を徘徊し、子供とはいえ、お化けが道すがら「菓子をくれ〜」とおいすがつてくるその光景。

しかもお菓子をあげないとめねなく呪われるおまけ付きです。

・・・怖っ！

夫と話した日は、自分の想像が怖過ぎて、いつもよりもちょっと夫にくつついて寝ました。

いくらお化けでも、夫のことは避けて通りそうな気がしますから、安心です！

正直言って、私はお化けの類が大嫌いなんです。だって、足がな
いんですよ！？ どこからでも出てくるくせに、ものを動かしたり、
人を呪ったりするんですよ！？ お鍋でぶんなぐれないものは、怖
いです。

あ、そういう意味では夫も怖いかも。お鍋、あっさり回収されそ
うですよ。当たってもたいしてダメージ受けてくれなさそうです
し。

もしお化けと夫が対決したらどうなるんでしょう。頂上決戦です
ね！ でもなんとなく、そうなたらお化けが物凄く、可哀想な事
になりそうな気がします。

驚かそうとあれこれ手を尽くすお化けと、それを無反応、もしくは
不思議そうに眺める夫。

あ、ちょっとお化けに親近感を持ってしまいそうです。こっちが
一生懸命頑張っているのに、暖簾に腕押し、糠に釘。手応えがなく
てどんどん切なくなっていくんですよね。うん、分かります、その
気持ち！

・・・なぜか寝る前の想像のなかで、お化けとすっかり意気投合
してました。

翌日、遊びに来ていたレインが、ハロウィーンパーティをしよう
！ と言い出しました。

何を言ってるんですか、死者のお祭に生者が参加したらいろいろ

問題ありそうですよ!?

「何を言ってるんだは君の方だよ。ハロウィンパーティーはみんなで思い思いの仮装をして、カボチャ料理を食べて楽しくゲームをし、最期にお菓子まで食べられる素晴らしいパーティーだよ」

あれ？　なんだかだいぶイメージに隔たりがあるような。

「死者が街を徘徊して、子どものお化けさんがお菓子を脅し取れないと呪ってくるんじゃないんですか？」

「・・・決して間違っではないが物凄く明後日の方向の知識をつけさせたのは、君の旦那さまだね？」

どうしたんでしょう。レインのこめかみが引き攣ってます。

「ああ、失敗だったね。先に君の旦那に伝えた私のミスだ。まさかここまで大人げないとは・・・」

頭を抱えた友人は、ややあつて、私の両肩に手を置いてにつこりと笑いました。その目にはかつてみたことが無いほどのやる気が見えなっています。

「エーファとミリディアも誘ってるんだ。ヴォルフ殿の手料理にミリディアのお菓子。エーファとフィリウス殿が考案するゲームに、この私がデザインする衣装。それを仕上げるのは勿論君お得意の裁縫だ。会場の飾り付けは我が元夫殿がやるそうだから、君の旦那さまにも手伝ってもらおう。ほら、始まる前から楽しそうだと思わないかい？」

店長さまのお料理！　子猫さまのお菓子！　夫の同僚さんに女性

団員さまのゲームも面白そうです。それに友人のデザインする衣装！ 会場の飾り付けまで担当がふられているという事はきつと手の込んだものになるに違いありません。ハロウィーンパーティーって一体どんなものなのでしょう。ワクワクして来ました！

「なんだか、とっても楽しそうですね！」

「そうこなくっちゃ！ よし、そうと決まれば私はデザインを起こして来る。あとでうちのスタッフに材料を届けさせるよ」

任せとけ！ とばかりに大きくうなづくと、友人は本当にすぐに帰って行きました。

翌日、友人直筆のデザイン画と色とりどりの布やら針金やら羽やらいろいろな物が届けられました。

・・・8人分の衣装を縫うのって、結構大変ですね。

妻と夫のハロウィンパーティー？

型をとって、切って、縫って、縫って縫って縫いまくります！！

というか、忘れてました。友人はとってもおしゃれさんであるばかりでなく、非常に細かい点まで手を抜かない、真面目な性格です。でも遊び心もあって、多趣味。

その几帳面さと遊び心をふんだんに取り入れた衣装の数々は、縫っているだけでも楽しくなってくるものばかりなのですが、どうしてもひとつひとつの意匠が細かくて時間がかかってしまっんです。パーティー前に一度は試着してみてもらいたいですし、あまり時間がありません。

縫って縫って縫いまくるべしっ！

ところで、一体友人はどうやってサイズを測ったのでしょうか。私用の型紙を見たとき、そのサイズが少しもずれていなくて、ちょつと寒気が走りました。

私、友人に測らせたことないんですが。

どうやってこんなに正確なサイズをたたき出しているんでしょうか。・・・いえ、ここは追求するのはやめておきましょう。何だかその方が自分のためな気がします。うん、そうしましょう。

店主さまの衣装を作るとき、子猫さまの4倍近い布を使いました。子猫さまは私よりも小さな方で、店主さまは夫よりも大きな方ですものね。

ああ、でもこの衣装をきた二人が並んで立つたら、きつとすごく素敵です！！

見たい、非常に見たいです！

想像ただけで身悶えしてしまつて、思わず店主さまの衣装に顔を埋めようとしたら、後ろから、襟首を引っ張られ増した。うぐお、と可愛らしさの欠片もない悲鳴を上げてしまいました。うう、喉が痛いです。

恨めしい気持ちで襟を掴んでいる夫を見上げると、ぱつと手を離して何事もなかったように本に視線を戻しました。

む、いきなり人の襟を掴んでおいて、説明ひとつなく、何事もなかった事にする気ですね！？

「旦那さま、襟を掴まれたら苦しいです」

コクリ、と頷く夫。

・・・えーと。それは分かっているって事ですよね。分かつててやつてるんじゃない、なおさら悪いです！

叱ろうと息を吸い込むと、夫が私の手から縫いかけの衣装と針を丁寧に取り上げました。

なにするんですか、まだ途中なのに！

夫が遠くに置いた布を引っ張り上げようと手を伸ばして居るうちに、夫が私を抱えて立ち上がってしまいました。

もっつ、時間がないのにつ！

そのまま寝室に向おうとするので、夫の腕から落とされる覚悟で思いつき暴れたのですが、やっぱり、ビクともしません。

っていうか、やっぱりおかしいですよ、ひと一人抱えてこんなに揺るぎないってどういう事ですか。私だって結構力持ちなんです

よ、夫のせいで非力に見えますけど、そんなことはありません。断固主張しますっ！！

ジタバタ暴れていると寢床に降ろされ、寝具がかけられました。ああ、やっと眠れる・・・ってそうじゃないでしょう、私！

・・・あれ、いつかもこんなことが有ったような？ とにかく、もう時間が無いんですからもう少し進めておかないと。

起き上がろうとすると、夫が上からのしかかって来ました。

潰れます、内臓が口から飛び出しますっ！

バシバシ夫を叩いて苦しいことをアピールすると、少し身体を持ち上げてくれました。

私いつか本当に夫に押しつぶされてしまっんじゃないでしょうか。

「もう、寝ろ」

永眠させる気ですか！？

「まだ途中なんです、もう少し」

むずがるように夫の下から這い出ようとして、ふと、気づきました。

私、もしかして、眠いんでしょうか。だから感情の起伏が激しくなっているんでしょうか。

器用に体重を分散させてくれているので、夫の硬くて重い身体もなんだか、あったかいお布団のような・・・。こういうの、なんていうんですたっけ。あったかいなあ。

「あ、鳥の抱卵？」

お腹の下で、ほこほこにあったかくて。

親鳥さんは何も言わずに布団からはみ出していた私の腕をしまってくれました。

うん、衣装作りはまた明日。今日はもう、眠気に逆らわずに寝てしましましょう。

・・・お休みなさい。

妻と夫のハロウィンパーティー？

遂に完成しました！

8人分の衣装を完璧に作り上げてやりましたよ！友人の最後のチエックにはかなり緊張したのですが、太鼓判をもらいました。うん、自分頑張りました。

あとは当日を楽しむだけです。

なんだかんだで、ずっと見守ってくれていた影の功労者である夫にも完成の報告をしよう、と外に出ると、ちょうど元夫とご同僚と話をしているところでした。

おお、背の高い三人が並んで立つと、なかなか壮観ですね。さらにこれに店主さまを追加して、それぞれに女性陣を加えて、さっき出来上がったばかりの衣装を想像のなかで着せてみました。

・・・素晴らしい！

それぞれの印象にぴったりのテーマを選びだしデザインした友人の審美眼に間違いありません。

これは当日が非常に楽しみですっ！

自分の想像に夢中になっていたら、夫が不思議そうにこっちを見ていました。あ。話の邪魔をしてしまいましたね。とりあえず私は夫がのそばによって、2人のお客さまに挨拶をしました。

それから夫に完成の報告です！

「完成です、旦那さま！」

夫は無表情のまま小さく頷くと、頭に手を置いてぐりぐり撫でてくれました。これは褒めてくれているんですね！ 相変わらず大雑把な動きなのに力加減が絶妙で、気持ちいいです。

「衣装担当は君だったのか」

元夫のつぶやきで、そういえばお客さまの前だった、と気づいたのですが、夫のぐりぐりは止まりません。旦那さま、人前ですよ！

「でも、デザインはレインですよ。全体の準備と進行担当ですから」

それから、夫の手が止まったのを見計らって、ご同僚の2人の方を見ました。

「ゲームってどんなことをやるんですか？ 会場の飾り付けってどんな感じなんですか？」

「それは当日のお楽しみ。今知っちゃったら、つまらないだろう？」

うーむ、そうなんですけど、せめてヒントだけでも！

でもご同僚は教えてくれませんでした。ちえー！

「君はずいぶん楽しみにしているようだな」

何故か元夫も不思議そうに聞いてきました。どうしてそんなに不思議そうなんでしょう？ お祭りが楽しみなのは当たり前だと思うんですが。あ、そうだ、と思いついてひとついい事を教えてあげる事にしました。

「楽しみですよ！ レインも私もお祭好きですから。それに、いかに万全に準備出来るかでその人の評価が変わってくるんですよ！」

だから抜かりなく準備すれば、友人の評価も上がるかもしれませんよ、頑張ってくださいね！ という意味を込めていえば、元夫の顔つきが変わりました。

うんうん、いい感じです。うまく行けば、当日友人と元夫が仲良くおしゃべりをしているところが見れるかもしれません。頑張れ、元夫！

「ご同僚がやけにいい笑顔なのも気になるのですが、それよりも。」

あの一、旦那さま？

・・・どうしてあなたまでやる気満々になっているんでしょうか？

やる気になった旦那さまと元夫コンビは連日遅くまで作業をしているようです。でも会場の飾り付けって、そんなに何日もかかるものなのでしょうか？ 物置部屋からいろんな荷物を運び出しているのを見たのですが、いったいどんな飾り付けをしているのか、非常に気になります。

会場は保護者夫妻の別宅だそうです。様子を見に行きたくても完成まで立入禁止にしているのだとか。すごく気になります。

気になるといえば、ある日、友人が衣装の飾りの一部を取りにきたのですが、ひどくつかれた様子だったのも気になります。

「元夫がやけに張り切っているんだけど、もしかして、君、何か言ったのかな？」

言ったといえば、言ったような・・・いえ、言いましたね、思いつきいろいろ含ませて言いました。

えへつと笑って誤魔化せば、友人は胡乱げに私を見たあとに大きくため息をつきました。

「なるほどね、あんな才能があるとは思わなかったが、これは良かったのか悪かったのか。まあハロウィンの雰囲気は出るけれど」

友人はつぶやくように言うと、チラリとわたしの方を見て困ったように笑いました。

「彼らのやる気が君のせいで良かった。自己責任ってことで、苦情は受け付けないよ」

え、苦情を言いたくなる様な飾り付けになっているんですか！？
と言うか、苦情を言いたくなる様な飾り付けって、どんなものなんでしょうか？ 想像がつきません。友人はそれつきり話題を変えてそうそうに帰って行ってしまったので、詳細は全く聞けませんでした。

ど、どうしましょう。私、ものすごく余計なことを言ってしまったのかも知れません。

不安になって、帰宅した夫にも聞いてみたのですが、無言のまま、ヒントのひとつもくれませんでした。

でもまあ、パーティですし、どんな飾り付け方であってもそれは話題のひとつになりますよね。

この時の私は飾り付けを非常に気にしながらも、樂觀視していました。

そして迎えたハロウィン当日。

・・・元夫と夫を焚き付けたことを、心底後悔する羽目になりました。

妻と夫のハロウィンパーティー？

遂にやって来ました、パーティー当日です！

正式な開始は日が落ちてからになるそうですが、私たち女性陣は少し早めに友人宅に集まって衣装を着て、男性陣が迎えに来たら一緒に出掛けることになりました。

女性陣、きゃーきゃー言いながら着替えましたよ。やっぱり女の子同士は楽しいですねっ！ ちよつと友人と私の分の衣装について意見を戦わせたりもしましたが、そのほかの衣装については好評でした！

男子陣の着替えは元夫が責任を持って着せてくれるそうです。

もちろん、パーティー開始まで衣装はお披露目しませんよ。ちゃんと衣装を隠すための男性陣のマントと女性陣専用の被り物も用意しました！

被り物に関しては女性陣からとつても不評でしたが。

おかしいなあ、私デザインの自信作だったんですが。かわいいと思うんですよ、全身力ボチャ。ちゃんと下の衣装に影響が無いように丸みもつけてあるので、本物の力ボチャを着ているみたいに見えます。とっても大きな力ボチャですけどね！

「おお、こりゃえらく丸っこいな」

一際大きなマントに身を包んだ店主さまが笑い混じりに言うと、

一際小さなカボチャ、子猫さまが可愛らしい頬を膨らませました。
あ、まんまるです。

「あとで覚えてなさいよ、吠えづらかかせてやるんだから！」

怒り心頭といった感じの子猫さまに余裕の店主さまですが、この勝負、結果は見えています。せいぜい男性陣の吠えづら眺めてやりましょう！

二台の馬車に別れて、会場に向かいました。

・・・カボチャの被り物をのせいで、馬車がひどく窮屈だったのは誤算です。

会場につきました！

会場では保護者夫妻が出迎えてくれていたのですが、私は思わず隣に立っていた友人にしがみついてしまいました。

な、なんなんですか、ここ！

こんな場所だなんて聞いてないでよ！？

一言でいうと、廃墟、です。

元はとても荘厳優美なお館だったのだろうと思わせるつくりなのですが、それ故に埃と蜘蛛の巣が積もり、あちこちに壊れた物が散乱していて、寂れた感じがよく出ています。

しかもさりげなく見えるあの石は、お墓、ですよー！？

どうして玄関入口前の前庭にお墓があるんですか、どうしてお墓

の土が盛り上がった今にも何か出て来そうなんですか！？

「気をしっかり持って。まだまだ序の口だよ。し、しかし、夜にみるとまた、なかなか迫力があるね」

レインさん、平然とした風を装っていますが、なかが一個多いですよ！

「ようこそ、諸君。我が館で存分に楽しんでほしい」

「さあ、中へどうぞ？ グレインたちの力作をぜひ見てくださいな」

保護者夫妻は、そろいの黒の衣装を身に着け、長い牙が口元からちらちらと覗いています。吸血鬼の夫妻ですね！ 青白さを出すために衣装から出ている肌には白粉をはたいています。保護者の裾が波打つようになびく襟の高い外套と、奥方さまの胸元が大きく開いたドレスにふんだんにあしらわれた黒のレースが技ありですね！

そんな吸血鬼夫妻に再び促されて、恐る恐るお屋敷の中には入るうとしました。なんだかとてもないパーティーに来てしまったような気がしてなりません。

ビクビク怯えていたら、後ろからカボチャの被り物が引つ張られました。ビクつと怯えて振り向くと、そこには、無表情にたつ夫。それを見てほっとして息を吐いてから、私もだいぶ夫の無表情に慣れたんだなあ、しみじみ思いました。

くいくいと夫が何度もカボチャの被り物を引つ張るので、どうしたのだろう、と見てみると、男性陣がマントを外し、それぞれの小物を装着しています。

うあああつ！！ 想像以上です！ 似合いですよ、皆さん！！

思わず叫びそうになって、友人と視線を交わし、頷きあいました。
グッジョブ、私たち！！

子猫さまも女性団員さまも、ちよつと頬を染めながらそれぞれの夫を見つめていますよ。

店主さまは、その体格を活かして野獣の衣装です。金の髪とヒゲに合わせて、金糸で刺繍を施した上着の袖口には同じ金糸で作ったふさふさの毛と、長い尻尾をつけています。猛獣に無理やり服を着せたら、きつとこんな感じになると思います！

ご同僚は、折れ曲がった角と黒くて長い尻尾を持つ悪魔です。シヤツのボタンはわざと二つ三つ開けたままにしてみらい、引き締まった体を目立たせるために少し絞ったウエストラインをもつ黒のベスト。ご同僚がもともと持つ色気がさらに危険な感じでにじみ出てくる衣装になっています。

元夫は、銀色の長い刃の大鎌を持つ死神の衣装。わざと裾を破った外套に、長い鎖を腕に巻きつけています。ぼろぼろにしたフードから覗く銀髪と冴えた色を放つ青い瞳がぞくりとした危機感を覚えさせる仕様だとか。他の男性陣より若干動きにくそうな衣装になっているのは、友人デザインの影響です。

そして、夫はというと。

高襟を持つ外套に真っ黒の衣装をけだるげに着た、魔王さま、です。私が自分で作っておいてなんなんです、友人はなんで夫に魔王の衣装をデザインしたりするんですかね！？ 似合わないんじゃないんです、似合いですよ！ 威圧感が半端ないです、普

段の1・5倍です！

そんな魔王さまが、無表情のまま、私のカボチャの外套を引っ張っています。何でしょうか・・・あ、そうか！ 女性陣もカボチャ外套を脱げって事です。確かにもう会場入りしているので、外套は不要です。自分でカボチャを脱ごうと手を掛けて、

「ヴォルフ、脱がせて！ あ、破かないでね」

危うく咳き込みそうになりましたよ！？

見ると、カボチャを脱ごうとして上手く脱げなかった子猫さまが店主さまに手伝って貰ってるところでした。うわあ、子猫さま、それはちよつと危険だと思うのですが！？

「君も脱ぎにくそうだ。さあ、手を上げて」

ご同僚と元夫もそれぞれ脱がしにかかっています。衣装を作って何度となく妄想していた私は知っています。うああ、みなさんそれは危険ですよ！

ドキドキしながら見守っていると、私のカボチャにも手がかりました。そうですね、この流れで行くと、私も夫に手伝ってもらう事になりますよね。でも私はこの衣装の作者ですし、流石に一人で脱げるのですが、と視線で訴えて見たのですが、同じく視線で却下されました。いや、だからせめて言葉にしましょうよ、って私もです。

夫が引きそうにも無いのをみて、諦めました。

背後で、店主さまが息を飲む音が聞こえ、思わず会心の笑みを浮かべる私です。

ふっふっふっ、店主さまの負けは決定済みなのです。私と友人のタッグの恐ろしさを、トクと思い知るがいい！

被り物を取った女性陣を見て男性陣はそれぞれ予想通りの反応を示していました。

店主さまは食い入るように子猫さまを見つめ、ご同僚は固まり、元夫は不思議そうにしています。

夫は無表情のままです。うん、予想通り。

ふふふ、子猫さまはその可憐さを限界まで引き出す、ちよつといわずら好きそうな妖精さん衣装です。薄い羽は私の会心の作ですよ！　ただし可憐なだけではありません。ほんの少しだけ開いた胸元に、少しだけ丈の短いスカート。可憐さの中に混じる、一滴の妖艶さ。それが子猫さまをより魅力的にしているのです！

女性団員さまは、女性版悪魔です。長身と抜群のプロポーションを活かして、こちらの女性が普段絶対着ないような身体のラインがでる衣装を用意しました。オプションで禍々しく折れ曲がった角付けて貰い、手にはムチ、腰には剣。醸し出される色気の中にピリリとした危険な雰囲気。凛々しさのなかに、妖艶さが滲むっていい仕事してますね！

そして友人は、いつもの男装ではなく、少し少年っぽい格好をしています。半ズボンです。

「君は、仮装はしないのか？」

少し残念そうな元夫。

私は友人と見合わせてにやりと笑いました。
すかさずカバンにいれていたアイテムを友人に装着させ、ちよち

よいと化粧を施します。

これでどうだ！？

「っ！？」

元夫は目を見開いて口元に手を当てました。

さっきまでは少年っぽかった友人は、今やネコ耳と尻尾の生えた使い魔さんです。

友人は何度も瞬きして潤ませた目で元夫を見上げています。

ふふふ、少年のような格好にも関わらず、友人は男装の麗人としての動きを捨て去り、か弱げな雰囲気醸し出しています。それがこのネコ耳マジックと相まって、なぜかいたいたけな小動物のように見えてしまうこの不思議さ！ 半ズボンの生足がまぶしかろう！ ちなみにこの友人の性格を考えて、男装バージョンが出てきたとしても、きりりとした中にもはかなげな雰囲気混じり、庇護欲をくすぐること間違いなし！ 二重三重に仕掛けていますよ！

男性陣の反応に満足していると、友人が夫に何か耳打ちをしています。

はっ！しまった！ 周りの反応ばかりが気になって自分の事を忘れてました。私は杖を片手に持つ魔女の衣装なんです、友人のデザインに勝手に手を加えて怒られていたんです。

ものすごく嫌な予感がするんですが、一体夫になにを言ったんですかっ！？

小さく頷いた夫がおもむろに私の外套に手を掛けようとしたので、すかさず避けました。

ダメですよ、私の衣装はこれで完成なんです！

思わず杖を構えて威嚇すると、友人が楽しそうに笑いました。

「魔女が魔王に逆らっちゃダメだよ」

そうです。夫は今、魔王の衣装に身を包んでいます。似合い過ぎて怖いくらいなのですが、いつもの1.5倍の威圧感ですが、負けませんよ！ 気分は魔王戦に挑む勇者の仲間です！

・・・レベル1の魔女が魔王に勝てるわけありませんでした。

奮闘虚しく、あっさり夫に黒い外套を取られてしまいました。

私の今の服装は、真っ黒なミニワンピースに白のレースをあしらいい、首と手足にレースのバンドを嵌めています。魔女かメイドか微妙なラインなのですが、どっちにしても弱そうなのがポイントだそうです。

それでも友人に言われた通り、きつ、と夫をまっすぐに睨みました。弱いのに、気が強い。立場的に下だけど、どこか偉そう。それが私の魔女衣装のポイントです。

夫は私に睨まれても痛くも痒くもないようで、無表情でじっと私を見ています。強い視線でじっと見ています。見えています。まだ見ていま・・・ってちよつと長すぎませんか！？

何か言いたいことがあるなら言っして下さい！ 黙ってずっと

見られていると非常に居た堪れないのですが！？

つい夫の視線に耐えきれず、視線を外してしまいました。気が強いふりをしていても、結局はふりなので、小心者が改善されるわけではないんですね。

というか、どうして友人はそんなに誇らしげに笑っているのでしょうか。その笑みは私と夫ではなく、元夫に向けてあげたらいいと思いますよ！

チラリ、と夫を見ると、まだ瞬きもせずはこちらを見つめています。そろそろ眼球が乾いてきてしまうのではないのでしょうか。

他の男性陣もそれぞれの妻（と元妻）を食い入る様に見つめていたのですが、不意に示し合わせたように男性陣だけで素早く視線を交わしあっています。何かの結論に至ったのか、やはり同時に頷き合いました。

・・・前々からもしやとは思ってはいたんですが、本当に視線だけで会話するんですか、あなた方！？ 誤解や視線の意味の取り違えとかの心配はしないのでしょうか。残念ながら私には視線の意味は全く分かりませんでした。何故か保護者と奥方さまも男性陣の視線の会話の意味が分かったのか、とつてもいい笑顔を浮かべています。

いったいなんなんでしょうか。

でもまあ、はじめて視線だけで会話する場面を目撃出来たのでよしとしましょう！

滅多に見れないものを見れたので、何かいい事があるかもしれない・・・。

「さあ、パーティを始めよう」

・・・保護者が非常に楽しそうで、とっても嫌な予感がしました。

妻と夫のハロウィンパーティー？

私の嫌な予感をよそに、パーティーは楽しいものでした！

今にも何かが出てきそうな内装に手抜きは全くなく、夫達の意気込みをひしひしと感じましたし、店主夫妻が用意したグロテスクな見た目を裏切る大胆な味わいのお料理と、目玉や血糊の付いたクッキーやケーキなど、子猫さまも意外と丁寧に細やかな細工をしていました。

見た目的に食べにくいけど、美味しいから食べちゃうんですよ！
目玉に齧りつく悪魔やら魔女やらってのはたからみたら結構怖い光景ですよ。

男性陣は全く気にせず食べていましたが、最初、奥方さまと友人は手をつけられないようでした。友人の顔が若干引きつってもいまず。そういえば、友人はこういうグロテスク系は全然ダメでしたね。二人はあえて盛り付けを崩したものを夫と元夫にもらっていました。店主さまも子猫さまも気にしていないようで、むしろ「食べれないほどのものを作った私偉い！ あ、ヴォルフもちよっと偉い！」とおっしゃっていました。私と女性団員さまは見た目を楽しみつつ、美味しくいただいています。

「よく食べれるね。確か君はお化け系が苦手だと思ったんだけど」
パクパク食べている私に、どこか恨めしげな友人が言いました。

「見た目はあれですけど、美味しいことが分かっていますから。さすがに本当に内臓とか使ってたら食べられませんけど」

内蔵っぽい見た目のスープをはふはふ食べながら言うと、子猫さまがキョトンとした顔をしました。

「それ、本当に内臓を煮込んだスープよ？」

ピタッ、とスプーンが止まりました。

「本物・・・？」

「喰えるじゃねーか。よかつたな」

店主さまがニヤニヤ笑いながら言いましたが、私は半泣きになりながら、夫にスープの器を押し付けていました。知らなければ食べれても、知った途端に食べられなくなるものもあるんですよ！

夫は食べかけを渡された事にも特に感想もなく、スープを完食してくれました。頼りになる夫です！

・・・内臓スープを飲み干す魔王は、はたからみて迫力満点でした。

「それじゃあ、お腹も一杯になったところで、お待ちかねの余興と行こうか」

「女性陣は一枚ずつカードを引いてね。まだ中身はみちゃダメよ？」

デザート後のお茶をいただきながらまったりしていたところで、ご同僚さんと女性団員さまが動き出しました。ゲーム！ いろんなことをやるのでしょうか？ ワクワクしながら回ってきたカード

を一枚とると、表に「指令書」と書いてありました。

・・・一気に嫌な予感がぶり返してきました。

「これから夫婦で一組ずつここから出発して、まずは厨房に向かったあと、その指令書に書いてある内容を達成してきてもらいます。途中で何が起きるかはお楽しみ」

「リタイアしてもいいけど、その場合は二人一緒に罰ゲームを受けて貰うので、そのつもりで。途中までは皆同じルートをたどるけど、目的地は全部バラバラだからゴールはこの食堂に戻ってくることに」

嫌な予感が増していきます！ 何ですか、罰ゲームって。というか、リタイアしたくなるような何かが起きるゲームなのでしょう。思わず友人の方を見ると、なぜか友人も若干青ざめています。お祭り好きの友人が青ざめるなんて、もしかして予感的中ですか！？

手の中の白い封筒の中身を見るのが怖くなってきました。

で、でも、女性団員さまも一緒に考案しているはずですし、何だかとっても楽しそうにしてらっしゃるので、大丈夫ですよ、うん、きっと大丈夫です！・・・大丈夫じゃないと困ります。

「厨房ってどこにあるの？」

「俺たちが知ってる。この屋敷の中ならだれも迷わねーわな」

そうなんでしょうか。夫を見上げると、小さく頷いて見せました。そういえば、飾り付けは夫が担当していた訳ですし、これってちょっと有利なんじゃないでしょうか。やる気が出てきましたよ！

「それじゃ、まずはヴォルフ達から行ってみようか。途中で行き合わないように、少し時間を置いてからグレイン達かな」

「やった！ 一番乗りね。行くわよ、ヴォルフ。あ、もちろん前を

歩いてね」

子猫さまはランプ片手に、店主さまという巨大な盾を持って意気揚々と出発して行きました。なるほど、あれなら何が出てきても子猫さまからはあまり見えないし、店主さまが対応してくれますものね！ 私もそうしよう、と思っていると、友人がボソツと。

「正面から来るより、後ろから何かがくるほうが怖いと思うんだけど」

た、たしかにっ！！

なにが起きるのかわかりませんが、正面から来られれば逃げようが有りますが、後ろから襲われたらアウトです。

いえ、何か出て来ると決まった訳じゃないんですが、何か出てきそうなんですよ、内装的に！

結局、友人は後ろに元夫を従えて出発しました。

いよいよ次は私達の番です！

「だ、旦那さま、な、並んで行きましょう！」

前も後ろも怖いので、私は夫と並んで歩くことにしました。ちよつと首を傾げた夫ですが、頷いてちよつと腕を曲げて差し出してきました。

えーと、これは腕を組めと？

でも確かにランプ一個で真っ暗な迫力満点の屋敷の中をあるくのは危険です。主に迷子的な意味で。

そつと夫の腕に手を掛けると、宥めるように軽くぽんぽん、とたたかれました。

そうですね、夫が居れば何も怖いことはありません！ いざ、出発しましょう！

勇気を振り絞って出発したのですが。

・・・ご同僚さん、悪魔のいい笑顔はとっても不吉な予感しかしませんよ？

ただ今、数日前に友人が言っていた言葉の意味が身に染みんでいます。

・・・内装担当の二人をたきつけるんじゃないかったっ！！

ランプ一個の明かりで映し出される陰影は、さらにこのお屋敷の不気味さをアップさせています。っていうか、これ、会場の飾りつけどころの騒ぎじゃないですよね！？ 一部改築してますよね！？ どんだけ手の込んだ内装を施しているんですか、そりゃ何日も帰ってくるのが遅いわけですよ！

時折風が立てる窓のきしみにさえ、びくつきながら、夫の腕を放さないようにしっかりと腕を巻きつけたまま進んでいきます。

夫の案内で何とか厨房までたどり着いたのですが。

どうしてここ、血まみれなんですか！？ これインクですよね！？

これまでの廊下よりもどこよりも乱雑に物が散らばっていて、まるで空き巣に入られたかのような有様です。厨房なので、包丁とかもあるから余計に怖いですよ！　というか、もしフォークとか踏んだらどうするんですか。危ないじゃないですか。これも夫たちの内装なのでしょうか？

思わず夫に視線を向けると、その意味がわかったのか、夫が小さく首を振りました。

「どちらか、もめたな」

・・・それって、店主さまと子猫さまのペアか、友人と元夫ペアがここで喧嘩を繰り広げたって意味ですか？　だとすると、たぶん、店主さまペアだと思います。友人はああ見えて意外と怖がりなので、よっぽどのが無い限り、ここで元夫ともめたりしないんじゃないでしょうか。

嵐の去った後のような、その有様を呆然と眺めていたのですが、夫に促されて指令書の存在を思い出し、開けてみました。

『指令？　厨房に隠された甘味と次なる指令書を捜せ』

・・・いきなり難易度高すぎです。

いえ、厨房がこの有様でなければ、割と普通の指令だったと思うのですが、一気に難易度が上がっています。

ランプはひとつしかないですし、どこに危険物が転がっているかわからない状況ですし、そもそも甘味と指令書がまだ存在しているかどうか怪しいですね。

とりあえず、一緒に近くの倒れた棚やら、真っ二つに割れた巨大

なまな板のしたやらを捜してみたのですが、見つかりません。

やっぱりないなあ、とあきらめかけたとき、インクがばら撒かれた流し台の中に小さなキャンディーボックスをひとつ見つけました！

「ありましたよ、旦那さま！」

ほっとして振り向くと、夫の手に少しインクで汚れた指令書がありました。あ、指令書も見つかったんですね！ それにしても、暗闇の中、廃墟と化した厨房に立つ魔王さまは迫力がありすぎです。本当にどうして友人は魔王を選んだんでしょうか、どうせなら熊の着ぐるみとかが良かったです。それなら迫力は10分の1に、安心感は10倍だったと思うんですが。

そんなことを考えながら夫から受け取った指令書を開いてみると、

『3階左端の部屋』

とだけ書かれていました。

その部屋に行ったらまた別の指令書が用意されているのでしょうか？

それでもひとつの指令が無事終了したことにほっとしてみると、視界の隅に何か白いものが動きました。

なんだろう、と思って見ると、厨房の外の廊下をなにか白い物体がふらふらと行き来しています。

え。あれは、もしや。

・・・おばけさん？

し、指令書に書かれた部屋まで、たどり着きました！！

厨房からここまでの距離、異様に長かったですっ！

いえ、もしかしたら短い距離だったのかもしれませんが、心理的にはとんでもない長距離のように感じました。

厨房の外の廊下で見かけたおばけさんは、その一体だけでなく、カボチャやら骸骨やら悪魔やらいろんな姿かたちをしたおばけさんが次々と現れて、姿に似合わない可愛らしい声で、一様にこう叫ぶんです。

「トリック・オア・トリート！（お菓子くれなきゃ、いたずらするぞ！）」

の、呪われるっ！？

そういえば、おばけさんたちはお菓子をゆすりにくるんです。さっきの指令でキャンディボックスを見つけておいて良かったですっ！！

本当は全速力で駆け抜けたかったのですが、次々と現れるおばけさんたちやわざと驚かそうとする物音などにいちいち悲鳴を上げてしまっていて、なかなか先に進めませんでした。

おばけさんたちにお菓子をあげないと私も夫も呪われてしまいますし、でも部屋に着くまでにキャンディの数が足りるかどうかがわ

からなくて、一個ずつ慎重に上げていたから、ものすごく緊張してしまいました。

ちょうど最後の一個を部屋の入り口前にいたおばけさんに渡して、無事、指令書にあった部屋にたどり着くことが出来ました！ ぎりぎり間に合いましたよ！

やっぱりこの部屋もくもの巣だらけですし、壊れた時計やら、わざと埃まみれにしたような家具や寝具が置かれていましたが、厨房とは比較にならないくらいまとまな状態でした。ここでは、喧嘩は起きなかったようですね。

まだどきどきしている胸に手を当てて、無事にこの危険な局面を切り抜けられた達成感を分かち合おうと夫を振り返ると。

なぜかいきなり壮絶なまでに気配を変えた、魔王さまがそこにいました。

燃え上がるような熱を浮かべた焦げ茶色の瞳にまっすぐに射抜かれて、手から空になったキャンディボックスが滑り落ちていきました。

それと同時に、カシャン、という乾いた音が。

・・・あ、あの、ま、魔王さま？ どうして今扉に鍵をかけたんでしょうか、どうしてゆっくり近づいてくるんでしょうか？

ほっとしていたところに何の前触れも無くいきなり訪れた危機に、思わず周囲を見回しますが、逃げ道がみつかりません。というか、あれ？ 私たち、仲間ですよ、ゲームと一緒にやっているペアであって、敵同士とかじゃないですよっ！？

魔王さまは、私の内心の混乱を知ってか知らずか、少しだけ首をかしげ、口元にかすかな笑みを浮かべていて。

「トリック・オア・トリート？」

・・・最後のキャンディー、死守するべきでした。

翌朝。

それぞれ上機嫌なパートナーに支えられながら、食堂で一同に会した私たち女性陣5名は。

・・・この失敗を二度と繰り返すまい、と視線だけで会話しあい
ました。

それからの日々は怒涛のごとく、でした。

夫の家を出たその足でまずは友人宅に向かい、何も聞かずに部屋を用意してくれた友人に付き添ってもらって、保護者宅へ報告へ向かいました。

ここでかなり体力と精神力を消耗するひと悶着がありましたよ。結局、どうにか夫と離縁したことを理解してもらうのに、一昼夜かかってしまいましたし。

・・・その間に、みるみるうちに保護者がやつれて行ったような気がするのですが、たぶん、気のせいですよ？

その日は、時間も遅いから、とそのまま泊めていただくことになったのですが、保護者と奥方さまが入れ替わり立ち代り、思い直すように説得してきました。

友人には先に帰っていてもらっていたので、完全な2対1です。

やっぱり、一筋縄ではいきませんね、保護者夫妻は。

対峙しているだけで、10歳は老け込んだ気分になりました。そして、二人とも引きません。引いているように見せて、がんがん押してくるタイプの二人です。似たもの夫婦ですね。

でも、このままの状態では離縁したという報告だけで終わってしまいます。

今日、というか、昨日保護者夫妻の元へ来たのは、報告だけが目的ではありません。

黒のリーフェリア就任のため、保護者に推薦状を書いてもらいにここへきたのです。

が、それどころじゃない感じになってきてしまっています。

・・・こうなったら、奥の手を使いましょう。

私は、奥方さまにこちらの事情の一部を正直に話し、協力を仰ぎました。

奥方さまは、私の話を聞くや否や、とてもいい笑顔で席を外すとしばらくして保護者に推薦状を書いてもらってきてくださいました。

保護者はよっぽどのことでない限り、奥方さまの意見を最優先にしていることは周知の事実でしたので、奥方さまが私の味方についてくれたのは、本当に心強い限りです。

ただ、その後に保護者と遭遇したら、気のせいだったらどんなに良いか、と思わずにいられないほど、やつれ切っていました。

・・・保護者の身に、いったい、なにがあったのでしょうか？

気になって奥方さまに聞いてみたのですが、とっても素敵な笑顔で、気にしなくていいのよ、とおっしゃっていました。その笑顔に、なんだか背筋に悪寒が走ったのですが、あえて追求しないでおくことにします。触らぬ神に祟りなし、って言いますしね。

出来たてはやはやの推薦状を持って、神殿に行き、正式に黒のリーフェリアに立候補して、審査と厳しい口頭質疑試験の末に任命を

受けるまで、さらに丸2日。

もちろんその合間にも、同時進行で必要なことを学んだり、調べたりもしていました。

・・・ときどき、夫は今なにをしているかな、とか。
ちゃんと朝起きていてるかな、とか、ご飯食べているかな、とか。
ふとした瞬間にそんなことを考えたりもしながら、過ごし。

そして、夫の家を出て5日目。

リーフェリア祭まで、あと二十日ほどを残して、私は正式に「黒のリーフェリア」に就任しました！

それにしても、この5日は、長かった。異様に、長かったです。
こんなに活動したのは、こちらに来て初めてかもしれません。

完全に睡眠不足続きですが、八つ当たりできる相手もいませんので、すきを見つけて仮眠をとるようにしています。ですが、夢見が悪くて、しょっちゅう起きてしまうので、あまり休めていない状態です。クマさんの抱き枕でゆっくり寝た・・・いえ、なんでもありません。

もうお肌がボロボロですが、仕方ありませんよね！

リーフェリア祭では、「神の花嫁」とも言われる、二人のリーフェリアが表と裏の舞台をつかさどる巫子として選出されます。

裏の舞台と呼ばれる夜の部をつかさどる巫子が黒のリーフェリア、私が勤める役柄です。

今年、黒のリーフェリアになる資格があるのは、「賢妻の勉強会」に参加していた、私たち5人だけなんですよね。

さらにその5人の中で、本当の意味で黒のリーフェリアになる資

格をもつのは、こちらの世界に渡ってきてから一年未満で、夫と離縁し、一応未婚者となった私だけでした。

もし私が立候補しなければ、今年は該当者なし、ということ、黒のリーフェリア抜きで祭が行われる予定だったのだとか。

つまり、当選確実の自己推薦枠ってことですね！

それでも、通常は数ヶ月前には申請と認定が行われ、祭事について日々事細かに学ぶものなので、ぎりぎりでの立候補に一部の神官から難色を示されましたが、そこは強引に突き進ませていただきました。

表舞台で活躍するリーフェリア役は、この領内の年頃の美しい娘さんが選ばれるのだそうです。黒の方は老若男女問わず、ということになっているそうですが、表は必ず女性がやるのだとか。そういえば、リーフェリアって女性の名前ですもんね。男性がやるとやっぱりちょっと違和感があるのでしょうか。

先ほど、私と対になる表のリーフェリアと挨拶させていただいたのですが、隙のない美女！というのがピッタリな、背の高い身のこなしのしなやかな女性でした。白いリーフェリアの衣装が良く似合っています。

私は背が低いので、全然対になっていません。残念です。

眼福を喜んでいると、ここが神殿である以上、居てあたりまえの天敵とも遭遇してしまいました。

フロイン教師が、まっすぐにこちらに向かってきます。

この人と接触する機会を減らすために、ギリギリまで立候補しないつもりだったのですが、仕方ありません。

いくら天敵といえども、今の私は神の花嫁である、黒のリーフェリアですから、びくびくする必要はないはずです！
ここは堂々と、逃げましょう！

「黒のリーフェリア。どこへ行く気ですか？」

・・・そういえば私、鈍足でした。

13 限りある時間を有効に使いましょう？

例えば。

夫の基本が無表情だとするならば。

私の天敵である教師の基本は微笑みです。

こげ茶色の瞳で感情と心情を雄弁に語るのが夫とするなら。

教師の水色の瞳は、決して何も気取らせません。

要するに、教師は腹黒なのです。真っ黒けです！

微笑みを浮かべていながら、本当はちつとも笑っていないくて、その表情のまま、心に突き刺さるような嫌味を次々といってくるんですから、間違いなしですよっ！

今もありがたい黒のリーフェリアとしての心得を説いているのですが、それらは全て、巧みに裏の意味が込められています。非常に頭の良い方なんでしょうが、そんなところで頭を使って特技を披露しても、それってなんの自慢にもならないと思うんですね、本当に。

奥方さまから教えていただいたのですが、教師は私がこちらに渡って来てしまわずと以前から、黒のリーフェリアを捜す名目で、それとは真逆の動きをしている人なのだそうです。

私たち5人は全員、保護者によって保護されていますが、この教師と保護者は師弟関係にあるのだそうです。

奥方さまと保護者が会おう前から自由にお館に出入りしていて、私たちのような「訪れし者」と呼ばれる渡り人に、次々と縁談話を

持ち込んでいたのだとか。

まあ、そういう意味では、私と夫が出会ったきっかけを作ってくれた一人だとも、いえなくはないんですけどね。うん、そう思うと、なんだかちよつと感謝したくなってしまうかも……。

いえ！ 夫と引き合わせてくれたことと、今回のこの件は別問題です！

とにかく、今年は黒のリーフェリアがいないと思って安心していたところに私がしゃしゃり出てきてしまったので、非常に怒っているようです。

でも、私だって目的があつてここまで来ているわけですから、絶対に黒のリーフェリアを降りたりしませんとも！

「……黒のリーフェリア。私の話を、聞いていませんね？」

あ、まずい。決意を新たにしている全く聞いていないのが、ばれました。

「あなたは。本当に。」

「フロース教師、そのくらいにしてあげなさい」

氷よりもなお冷たい声で、本格的に嫌味の槍が降って来る予感に首をすくめていると、教師と同じ真っ白な、でも豪華な神官服に身を包んだ男性が割って入ってきました。

……この神殿の、神官次長です。

神官長の次に偉いから神官次長。そのままですね。

教師と同じく、ぱつと見はとても優しげな表情をしています。

「せっかく立候補してくれた黒のリーフェリアを、そういじめるものではないよ」

たしなめながら、神官次長は、私の手を取りました。

「祭りまであまり日はないが、焦らず、ひとつひとつ覚えていけばいい。なに、前夜祭までに覚えられなければ覚書をこっそり用意したっていいのだからね」

にこり、と笑いながらちやめつけを発揮するのは、私が緊張していると思い、それを解きほぐそうとしてくれているからでしょう。私は、不自然にならないようにそつと手を取り返すと、長い袖の中に隠しました。

「・・・ありがとうございます、デールイ神官次長さま」

「本当は本祭の方もぜひ一度見てもらいたかったが、君は前夜祭で帰還することになるからね。せめて、それまでの間に街を見てまわるといい」

結婚後に夫と友人の目を盗んで一人で街に買い物に出ていた私に、リーフェリア祭の前夜祭こそが、自分の家に、世界に帰還するための儀式だと教えたのは、この神官次長でした。

「それでは、一度見てみたい場所があるのですが、お許しただけですか？」

「おや。それは、神殿の中かな？」

そして、その儀式に参加したものは、みな無事に帰還を果たしている、とも。

とても優しい声で、そう、いいました。

「はい。前夜祭の儀式の会場が見てみたいんです。全然知らない場所だと、緊張してしまって、手順も何も忘れてしまいそうなので・・・」

「もちろん構わないとも。そうだな、私はこの後フローイン教師と話があるから、この者を案内につけよう」

その日から、私の中に、ひとつの推測が生まれました。

「ありがとうございます」

お礼を言ってから、一応、教師にも頭を下げて挨拶すると、神官次長の後ろに控えていた少年が一步先を歩き出し、その後ろをゆっくりとついていきます。

教師の鋭い視線が、私の背に突き刺さっているような気がしましたが、気のせいだと思っことにしました。

黒のリーフェリアの衣装が、袖の長い黒衣でよかったです。

・・・白くなるほど握り締めた、震えるこぶしを隠すのに、ぴったりでした。

限りある時間を有効に使いましょう。？

リーフェリア祭まで、あと12日。

日中は黒のリーフェリアとしての儀式の手順や作法などを神殿で学びながら、夜は友人宅に戻り調べ物をする日々が続いています。

先日、神殿で儀式の間を見た時から、私の中に一つの仮説が立ちました。

私としては、ぜひとも却下したい仮説だったので、その証拠を見つけるために調べました。

時には奥方さまの元を訪ねて調べ物をしたり、友人に頼んで街の有識者を紹介してもらって所蔵の書物を調べたり、街の生き字引と呼ばれる老人たちに話を聞いたり。必要があれば、神殿の書庫に忍び込んだり、保護者に直接お願いして機密情報を見せていただいたりしました。

そうやって調べれば、調べるほどに、私がたてた一つの仮説が正しい気がしてきてしまいます。

それでも、否定できる要素を探して調べていたのですが、その仮説が確信にいたった今日。何もする気になれなくなって、神殿に行ったほかは、友人宅に引きこもりました。

許容量を軽く超えた事態に、考えなければならぬことはたくさんあるのに頭がからから音をたてて回るだけで、何も思いつかなくなっています。

友人に用意してもらった部屋で、寝台の上に寝転び、頭を抱えま
した。

・・・もう、なにかも、私の限界値を突破している気がします。
叫びたい。

思いつきり叫んだら、少しはすっきりしそうな気がするのですが、
とりあえず、友人に物凄く心配をかけてしまう事だけは確実ですよ
ね。

睡眠不足もとつくの昔に限界値を振り切ってしまったので、
思考回路がおかしくなっているのかもしれない。

仮眠はとっているのですが、ここ最近ひどく夢見が悪くて寝ると
余計に疲れちゃうんですね。でも体力的にもそろそろ寝ないと倒
れてしまいそうですし。

目の下にできているクマが、目の上まで侵食してきたらどうしま
しょう。

重要なことと取り留めのないことが、ぐるぐると回り続ける自分
の思考に翻弄されているうちに、どうやら気づかないうちに眠って
しまっていたようです。

・・・夢をみました。

テラスに続く大きな窓が、音を立てずに開き。
そこに、夫が、立っている夢です。

どうして、ここに夫がいるのでしょうか？

寝台から起き上がりながら、友人が私に用意してくれた部屋は三階なのにいったいどうやってここまで来たんだろう、と不思議に思ったのですが、これは夢ですからなんでもありなんですよ、きつと。

でも、夢だとわかっていても、やっぱり聞きたくなってしまうす。

「どうして、ここにいらっしゃるんですか？」

「・・・どうして、かな」

私が夫の夢を見るときは、現実に輪をかけて無口で一言も喋らないことが多いのですが、この夢の夫は低く囁くような声で返事をしてくれました。

「これ、夢、ですよね？」

「・・・夢だ」

思わず確認してしまうと、夫がまた返事をしてくれました。すごい。これはすごくいい夢に違いありません！

だんだん嬉しくなってきた、嬉しさのあまり、調子に乗ってしまいそうな私がいます。

夢だから、いいですよね？

うずうずする感じが我慢出来なくて、窓辺に立つ夫にそっと近づいてみました。夫はいつもの無表情のまま、ただ静かに焦げ茶色の目で私をみてくれています。

それに勇気を得て、腕を伸ばして夫の服の端に触れてみました。夫は全く動きません。嫌がっていないようです。それでも夫を驚かしたりしないように、そつと慎重に夫の大きな体に腕をまわしてみ

ました。

あ、夫の感触です。

嬉しさが抑えきれなくて、ぎゅっと抱きついて、夫は微動だにしません。

それがまた夫らしい気がして、少し笑ってしまいました。

「夢でも、いいです。夢でも、嬉しいから。出てきてくれて、ありがとうございます」

夢の中の夫の体にしがみつき、触れた部分から伝わってくるぬくもりが、香りが、ぐるぐる空回りしていた思考をどんどん落ち着かせてくれていきます。

すんと、と。

急に目の前が開けたような、そんな感じがしました。

・・・そうですよね。

私一人でどうにかしようとするから、どうにもなくなるんですよね。

一人で手におえないなら、手を、借りればいいんです。

「私、全部、終わらせてきますね」

夫はまるで、万能薬みたいな人ですね。

それまで重く押し掛かってきたものが、重さはそのままでも、耐えられないものから、終えるべきものに変わりました。

うん、目標がはっきりしたら、後は突き進むだけですものね。

「全部終わったら、そうしたら、やりたいことや話したいことがたくさんあるんですよ」

「・・・全部、終わったら？」

「はい。その時は、また星空を見に行きましょうね」

いつかみた空がすぐ近くまで迫ってくるような、あの満天の星空をもう一度夫と一緒に見たいです。

「・・・俺に、して欲しいことは？」

「夢に出てきてくれただけで、もう十分です」

夢だと思っていたから、言えたことも、夢だと思っていなくても言えないこともありました。夢でも会えてよかったです。

でも、もしかしたら。

現実では、いえないままになってしまいかもしれませんから。

「ありがとう」

もう一度だけ、心を込めて言いました。

安心したからか、夫のなつかしいぬくもりが心地よかったのか、私はそのまま夢の中で眠りに落ちていきました。

夢の中で眠る夢を見るなんて、なんだかおかしいです。

くすくす笑いながら目を閉じると。額に何かが触れて。

ちゅ。

と小さな音を聞いたような、そんな気が、しました。

翌朝。

昨夜見た夢を思いだして、寝具の中で悲鳴をあげながら転げまわ
り。

・・・結局、友人に心配されました。

14 根回ししましょう。

夫の夢を見た翌朝。

額に触れた感触を思い出して悲鳴を上げつつ転げまわっていた私に、寝間着のままの友人が何事かと心配して様子を見に来てくれました。

心配する友人に黙っているわけにも行かず、正直に夕べ見た夢を思い出していたと話すと、私のほうをじっと見て、なんともいえない表情になりながら、小さく頷いて出て行きました。

なんとなく、部屋を出る直前に苦笑されたような気がするのですが、気のせい、ですよね？

私はまだ火照る顔を両手で軽く叩いて冷しつつ、着替えを始めました。

それにしても、夢って凄いですね。

睡眠不足にさせたり、辛い事を思い出させたりもするのにな、それと同時に、こんなにも幸せな気分になんてさせてくれるんですから。

私から一方的に離縁したので、夫に嫌われていても仕方がないとは思っているんです。でも、夢の中の夫は無表情のままながら、穏やかな目で私を見てくれていました。

たったそれだけで。

とても安心した自分がいました。

夢の中だけでも嫌われていないと思うと、それだけで元気とやる気が湧いてきます。

本当に、よい夢を見ました。

前向きになつて周囲の手を借りると決めた私は、まずは友人を巻き込むことにしました。

友人は毎日忙しそうにしながらも、必ず私と朝食を一緒に食べてくれています。そして、毎朝少し眠そうにしながらも、身だしなみには全く乱れがありません。もちろん、今朝もビシツと隙のない男装です。さすがオシャレさんですね。

「だいぶ顔色がよくなったようだね。ここ最近の君は亡霊のようだったから」

「心配かけてすみません。でも、もう大丈夫ですよ！」

解決策はこれから考えればいいですし、周りの手を借りると決めてから、道は幾通りにも広がっています。

今朝の夢をちよつと思ひ出して幸せな気分で答えると、友人はやっぱり生暖かい目で私を見ているような気がするのですが、どうしてでしょうか？

「よく眠れたようでよかった。君は睡眠不足になるといつも暴走するから」

なんでもない、という風に友人が首を振ってそういいました。確かに友人の言うとおり、寝不足のときの私って、いろんな意味で暴走しがちな気が。うん、要注意です。

私は朝食を食べ終わった頃を見計らって、友人にひとつ、頼み事をすることにしました。

「レイン、私はこれからあなたに無茶振りをします」

「・・・なんだい、藪から棒に」

朝食を食べ終えていきなり言い出したので、友人をちょっと警戒させてしまったようです。

いや、無茶ぶりするって予告されて嬉しい人は居ないですね。ちよっと切り出し方を失敗しました。

「これ、揃えてもらえませんか？ 私の神殿入りが前夜祭の前日、リーフェリア祭の2日前からなので、その前に」

用意していた忘備録を手渡すと、友人はざっと中身を確認してちよっと眉を寄せて、口元に手を当てて考えています。

「・・・これは、たしかに無茶振りだ。というか、なにに使うつもりなのかな？」

まあ、忘備録の中身が中身なので、それは聞かれるだろうなっと思ってました。

「その中の数種類を混ぜると、汚れ落としになるんですよ」

勘のいい友人ですので、たぶんこれだけで私が何をしようとしているのか、ある程度予想がついたのでしょう。特に何も言わずに期日までに用意してくれると約束してくれました。

「・・・ところで、私との約束は覚えているんだろうね？」

友人がついでのように尋ねてきたのですが、いつもはまっすぐな

視線が私を心配して揺れ動いているのが分かります。

「もちろんです」

「それなら、いい。料金は出世払いにしといてあげるよ」

しっかりと頷けば、私の意思を尊重してくれました。友人には甘えてばかりですね。いつか、ちゃんとお返ししなくちゃな、と思いながら、今は甘えさせてもらうことにしました。

その後、友人は仕事に、私は神殿に向かいました。

神殿も祭りが近づくにつれて、皆が忙しそうに動き回っている中、今日もやっぱり天敵と神殿内で遭遇してしまいました。

いつもの心得を説いているように見せて、さりげなく隠語を交えて私がいかに黒のリーフェリアにふさわしくないかを熱弁していますが、もちろん全部右から左へ流します。

あまりにも熱弁が止まらないので、夫との離縁を決意した日にしたためた手紙を天敵に叩きつけました。離縁当初は、渡すかどうか迷って、結局やめておいたのですが、よくよく考えれば天敵相手に遠慮は必要ありませんものね。

これで天敵も見事、私に巻き込まれました！

これほど厄介ごとに巻き込む事に罪悪感を覚えない相手はいませんね！

手紙を受け取った天敵の反応を見ずに廊下をかなりの速さで歩いていたら、神官長様にぶつかってしまい、お叱りを受けたりもしましたが、決して、敵前逃亡したわけじゃありませんよ？

勇気ある撤退ですとも！

神殿での勉強や打ち合わせ、諸々の相談事などを行ったあとは、今度は保護者宅へ移動し、奥方さまにお会いしました。

本来なら、まずは保護者に相談すべきことなのかもしれませんが、正直奥方さまのほう話しやすいですし、ちょうど保護者は不在だそうなので、遠慮なく奥方さまに私の仮説と、調べたことの結果をお伝えします。

初めは柔らかな笑みを浮かべていた奥方さまの表情が、私の話が進むに連れて、厳しいものになってきました。

「力を貸していただきたいんです」

「あなたが、そう言ってくれるのを待っていたわ」

その強い眼差しに、さまざまな可能性と打つべき手がめぐるしく浮かんでくるのをみて、やっぱり奥方さまは賢いだけでなく、強い方だと改めて思います。

待っていたという言葉通り、奥方さまはその場で私が必要としていたいくつかの情報を与えてくれただけでなく、すでに神殿内に臨時の警備を配している、ということも教えてくれました。

さらに帰還の儀式といわれている前夜祭には、さらに数名をひそかに派遣することが決まっているのだとか。

おかげで、ほんの少し、私の不安も軽くなりました。

流石は、才女と名高い奥方さま。この手回しのよさは凄すぎです。

「ところで。私からいくつか質問があるの。もちろん、正直に答えてくれるわね？」

ほっとして気を抜いたところを狙ってかけられた声に、思わずびっくり、と肩をすくめたのですが、奥方さまはいつも通りの上品な微笑を浮かべています。

だけど、奥方さま。

・・・目が、笑ってないですよ？

その後、某天敵のような表情のままの奥方さまに、取調べのような質問の数々を浴びせられて精神力を使い果たした私は、保護者宅に泊めていただくことになり。

精神的に疲れきってしまっていた私は、夢も見ずに爆睡してしまいました。

・・・夢が見れなくて、残念です。

15 黒のリーフェリアのお仕事です。

リーフェリア祭の二日前の早朝。

いよいよ、神殿入りをする日がやってきました。

保護者宅を訪れてから、奥方さまに削り取られた精神力が回復しないまま、神殿入りの日を迎えてしまいました・・・。

私、今回の件で、奥方さまに対する認識を改めました。

奥方さまは、確かに賢妻の名にふさわしい才女で、素晴らしい女性なのですが。

・・・怒らせては、いけない方でした。

何なんでしょう、あの迫力。容赦なく追いつめられて、秘密にしておこうと思っていたことも、そうでないことも、全て洗いざらいしゃべらされてしまいました。

私がぐったりしていた翌朝に、保護者が亡霊もはだして逃げ出すほどげっそりとやつれていて、ただ一人、奥方さまがとても爽やかな笑顔でいらっしゃったのは、たぶん・・・気のせいじゃないと思います。

ええ。私、今後絶対奥方さまを怒らせたりしないと誓いますよっ！

心なしぐったりしつつも神殿入りするまでの日々を忙しく過ごしていたせいか、あれから夫の夢は見れませんでした。

時々ふと、近くに夫がいてくれるような、そんな気がするときがあるのですが、現実でも夢でも一度も出てきてくれません。残念です。

神殿入りする前に、もう一度だけ、あの優しい焦げ茶色の目を見
たかったな、と思いかけて、大きく首を振ってその思考を振り払い
ました。

私、奥方さまと話していて、決めたんです。

全部終わったら、自分へのご褒美として、夫に会いに行こうと！
夫にとっては迷惑だろうな、とも思うのですが、これはご褒美で
すから。・・・そういう言い訳をつけて、会いに行こうと思ってい
ます。

さて。

ご褒美を目指して、ここからが正念場。

体力気力知力の限りを尽くして、運と根性とで乗り切る場面です！

強力汚れ落としの考案者でもある母から「根性だけは兄弟一」と
お墨付きを貰っていますから、自信あります。

もちろん、友人との約束だって、きちんと守ってみせますよ。

友人は、本当に期日までに私が渡した通りのものを全て揃えて来
てくれましたから、今度は私が約束を守る番です。

心配そうな友人に見送られながら、ひとり気合を入れて、友人宅
を出発しました。

その直後。

なにか・・・視線のようなものを感じた気がしました。

周りを見回してみたのですが、早朝ということもあって通りには
誰も居ません。

気のせい、でしょうか？

ちよつと首をかしげながらも、神殿に到着するまでの間、視線のような、ちよつと頬が熱くなってくるような、その不思議な感じは、ずっとなくなりませんでした。

女性神官に出迎えられて、神殿入りするまで、ずっと。

・・・なぜかその感覚に名残惜しさを感じて、閉まる門を見つめてしまいました。

門が閉まりきるの見届けると、いつの間にか、かなり先を歩いていた女性神官に促されて、神殿の奥へと向かいます。

ここからが、黒のリーフェリアとしてのお仕事です！

まず案内されたのは、楔場でした。

身を清め、頭から聖水を何度もかぶります。春が来ているとはいえ、暖められてもいない聖水はかなり冷たいのですが、ここはぐつと我慢、我慢。

それから黒のリーフェリアの正装である袖の長い真っ黒な衣装を身につけ、ついでに必要なものを全て袖の中に隠しておきました。

この袖、邪魔かと思いきや、意外と便利なんですよね。

そして、神殿の中でも最奥に位置する本殿で、真っ白な衣装に身を包んだ表のリーフェリアと一緒に、神官長様による神の伴侶となるための儀式を受け、柔らかな桃色の花を預かりました。

その花を聖室と呼ばれる香を焚き込めた小さな部屋に持って行き、

一日かけてお世話をします。

日の出の直前にやってくる表のリーフェリアと交代すると、見事、黒のリーフェリア、神の伴侶となったことになるのだそうです。

これで私、また人（神）妻になるわけですね。

この聖室にいる間、私たちはひたすら聖水を浴びつつ、花に聖水を注ぎます。

その間、眠ってもいけませんし、座って休む事も出来ません。

前夜祭の最後の帰還の儀式を行うまで、聖水以外の飲食も禁止されていますので、神の伴侶というのも、なかなか体力勝負ですよ。

でも、表のリーフェリアにこっそり聞いたら、表はただ待機しているだけでいいのだとか。お祭りの当日が忙しいですから、表のリーフェリアはここでは休んでおけ、という事なのでしょうか。
うらやましいです。

休めないのはともかく、聖水以外を口に出来ないのが辛い！

ここ最近、ちゃんと三食友人の美味しい手料理を食べていたので、もうお腹がすき始めています。それに長いこと香を焚き込めた部屋にいたので、頭がちよっとくらくらくしています。

「香」と言えば聞こえはいいですが、要するに「煙」ですものね。私、いまちよっと燻製にされているお魚やお肉の気持ち分かるような気がします。

それでも、寝てしまうこともなく、無事に表のリーフェリアと交代したあとは、今度は神殿の半地下にある祈祷所での祈りと清掃が待っています。

・・・なぜ、清掃？

初めてそれを聞いたときは、思わず教官役の女性神官にそのものずばり聞いてしまったのですが、あいまいに微笑んでごまかされてしまいました。

結局その理由は分からないままなのですが、とにかく黒のリーフエリアは昼の間、神殿のあちこちを巡って祈り、清掃するのが役目なのだから。

神さまの伴侶も、家事能力が必要だったとは。

夫の所で掃除能力を磨いておいてよかったです。

まだ空が白み始めたばかりなのですが、頭がクラクラしていることもあり、早目に移動しておく事にしました。

半地下、と言ったのはまさに文字通りで、本殿の豪華さからはかけ離れた質素な祈祷所は、その下半分が地下に埋もれています。残り上半分は地上に出ているのですが、外から見ると、物凄く低い祈祷所に見えるに違いありません。

それになぜか、酷く暗いです。上半分が地上とは言え、まだ日が登っていませんしね。

・・・それにしても、真っ暗です。

一度来たことがあるので、そんなに怖がる事はないと分かっているのですが、やっぱり暗いのはちょっと苦手です。

意味なくビクビクしながら祈祷所で一人座っていると、ようやく、朝日が差し込んで来ました。

暗闇に慣れた目には、その光はあまりに眩しく、神々しくて直視できません。

・・・ああ、これなら、納得です。

ここは質素だと思っていました。光が差し込んできた、ただそれだけで、ここは特別な場所になりました。

私は心を込めて、掃除しました。

ここでは香も焚き込まれていないので、掃除をしている間に頭のクラクラもだいぶ収まりまってきましたし、もうすぐ別の場所へ移らなければなりません。

最後にもう一度、光にあふれた祈禱所を眺めてから、移動しました。

次は、聖誕の間と呼ばれる聖室のひとつです。

そこは、私たち訪れし者にとっても、非常に縁深い場所ですから、しっかりと汚れを落とさせていただきますよう！

なにしろ、わざわざ神官次長様自ら念入りに清掃するようにとお達しがあり、天敵からくれぐれも手を抜かないように、と言われていきますからね。

ええ、友人の収集能力の結晶とも言えるこの洗剤で、私の清掃能力の限りを尽くし、見事磨き上げて見せましょう！

・・・といっても、ここには私一人しかいないんですけどね。

気合を入れすぎてちよつと筋を痛めつつ、その後は神殿内の数カ所を巡って清掃しながら、夜の訪れを待ちました。

お腹が空いてますし、ちよつと眠いです。

夕方頃から、またあの香を焚き込めた部屋で待機になってしまったので、頭もクラクラしてきました。

もうやる事がないのですが、座るのも禁止なので、壁に寄りかか

って立っています。

時々眠りそうになってしまつのですが、女性の神官にゆり起こされるので、できる事と言えば、ぼんやりと考え事をするくらいです。

もうすぐ夜ですから、そろそろ夫が帰ってくる頃でしょうか。

ふいに、夕日を背にして、馬に乗った夫の影が脳裏に浮かんできました。

あれは、とても綺麗でした。

もう一度、見てみたいです。

次々にやりたいことや見たいもの、言いたいことなどが浮かんでくるのですが、それが全部夫に関わることばかりで、ちょっと笑ってしまいました。

私、もしかしたら。

自分で思っているよりも、夫のことが好きなのかもしれませんね。

自分で自分の気持ちが量れないなんて、なんだか不思議です。

全部終わったら、夫に会えますよ。

だからご褒美目指して、もうひとがんばり、しましょね！

ようやく日が落ち、辺りが黒一色に染まる頃。

豪華な衣装に身を包んだ神官たちと、表のリーフェリアが入ってきました。

・・・前夜祭が始まります。

16 辞退します。

前夜祭は、豪華な黒の神官服の神官次長と、同じく真っ黒の衣装に深々とフードをかぶった神官たちと一緒に移動し、あちこちで祈りを捧げ、私が持った花を表のリーフェリアが待機する部屋まで届けば完了です。

やること自体はとっても簡単なのですが、食事も食べれず、睡眠不足状態で掃除という体力を使う事をしたので、もう立っているだけでふらふらします。でも、気力をふりしぼって表のリーフェリアに花を渡しました。

その時に表のリーフェリアがちょっと驚いたような顔をしていたのですが、そんなにおかしな顔をしていたでしょうか？

もしかしてクマがまぶたまで侵食してきてしまったのかもしれないかもしれません。

・・・それはたしかにちょっと夜中には会いたくない顔ですよ。

「これから聖域に移動するが歩けるかな？」

あまりにも私が一か所に立ってられないせいか、神官次長が小声で聞いてきます。

ある意味ここからが本番なんです！

残りの体力を使い切っても行きますとも！

そうです、これまではリーフェリア祭に必要な黒のリーフェリアとしての動きです。そしてここからが、私にとっての最後の儀式といふべき、帰還の儀式が執り行われるのです。

「歩けないのなら、抱えて行くことになりますが」

「歩きます！」

横から天敵が同じように小声でいつて来ました。天敵に抱えられるくらいなら、這ってでも自力で行きますよ！

なぜか答えるまでの間の一瞬に、背筋に寒気が走るような鋭い視線を感じて、反射的に周囲を見回したのですが、気のせいだったようです。

・・・少し、神経質になっているのかも知れません。

天敵の言葉を拒否する意味を込めて返事をしたのですが、思いのほか力強い声が出て、それに自分自身が励まされた気がしました。

そうです。

まだ始まってもないのに、氣力で負けたら終わりですよ！

私はパンツと両頬を叩いて、まっすぐ前を、そこにいた天敵と神官次長を見ました。

期待と困惑。

二人はなんだか対照的な色を瞳に浮かべています。

「参りましょう」

背筋を伸ばして、先を歩き出した神官次長に続きます。

帰還の儀式は、本殿ではなく、少し離れた木々で覆われた奥庭の一面にある聖地で行なわれます。

事前に見せて頂いていますから、どんなところかは分かっています。夜に見るとまた迫力が違いますね。

空にはリーフェリア祭直前を迎え、眩いばかりの星々が輝いています。

こんなに星がきれいな夜なら、夫と二人でゆっくり星見がしたかったなあ、とぼんやり考えてあわてて首を振りました。ぼんやりしている場合じゃないです。

その輝く星々の下に、ひっそりと佇むする、四つの柱。

屋根はなく、柱と床だけが存在するそこが、帰還の儀式を行う聖地だそうです。

「帰還の儀式はどのように行うのですか？」

私は気を抜くとぼんやりしてきてしまう意識をはっきりさせるためにも、神官次長に話しかけてみました。その間に、両袖に隠していたものを手のひらに落としておきます。

黒のリーフェリアとしての儀式と祈りについては、事前になんまり学びましたが、帰還の儀式については代々の神官次長が取り仕切られているとのことで、細かい部分は教えてもらえていないんですね。

「この聖地で祈り、贄を捧げるのです」

「贄、ですか？」

「ええ。この儀式を経て、神の伴侶は神の御元へ帰ることができるのですよ」

神官次長様が囁くような小声で答えてくれました。夜だからか、声がよく通ります。

黒のリーフェリアとしてここにいるからか、囁くような神官次長様の返事は普段よりも丁寧なものです。

「これまでの黒のリーフェリアと同じように？」

「ええ、そうですとも」

断言する声に、少し瞼を伏せました。目眩がひどくなって来た気がします。

「祭史を見せて頂いたんです。これまで帰還出来なかった黒のリーフェリアはいませんか」

「その通り。この儀式を受けた黒のリーフェリアは、全て、神の御元へ戻られていますから」

聖域が近づいて来ました。そこには、聖誕の間で見たものとよく似た模様が描かれています。

「違いますよね」

私は聖域を前にして、ギュツと手を握り、ちよつと声を張り上げました。遠くまで、聞こえるように。

「だって、私たちの故郷は、神の御元なんかじゃないです」
「知っていますよ」

神官次長と天敵を含めて9人の神官たち。
彼らは全て黒い衣装を身に纏っていて、夜に溶け込むようです。

「黒のリーフェリア。貴方は、銀の浄化を得て、神の伴侶としてのその御元に召される。それによって、我々は全ての穢れた者たちを浄化する力を得る」

「・・・穢れた者？」

初めて神官次長の声が、静かな落ち着いたものから、熱っぽいものが混じりだし、そして憎憎しげに私を見ました。

「そう。我らの世界に入り込む、穢れた血を葬り去る。我々の世界は、我々だけのもの。汚濁は全て浄化されるべきなのだから」

「此処にいる皆さんもそれを望んでいるのですか？」

黒いローブの神官たちは話すことも動揺することもなく、私を取り囲むことで、答えました。

神官次長は、飾りだと思っていた腰の小剣をゆっくりと鞘から抜き取りました。

逃げ道はありません。

じりじりと後ずさると、片足が聖域に似せた模様の一部を踏みました。

「貴方が帰還を望んでくれて、嬉しかった。黒のリーフェリアを捧げることで、浄化はより一層進むのだから」

私は強く手の中のを握り締めながら、じりじりと後ずさりします。

まだ、もう少し。

「だから、私に帰還の儀式のことを教えたんですか。い、生贄として殺すために？」

こ、声が震えてしまいました。

「贄の条件を満たすのは、もう貴方だけだった。さあ、そろそろ儀式を始めましょうか？ 尊き神の導き子にして妻めとなりし、黒のリーフェリア。これより、神の身元へお返しいたしましょう」

ゆつたりと微笑む神官次長の言葉に合わせて、包囲網がぐっと狭

まって来ました。

追いやられるようにして、模様の中央へ立ちました。神官次長の手には、銀色の、物騒な輝きが。

今しかありません！

手に握り締めていた母特製の強力洗剤を足元に叩きつけました。

瓶が割れ、中の液体が触れた場所から、床に描かれていた模様が消えて行きます。

汚れ落としにぴったりですね！ 効果のほどは、生誕の間で確認済みですよ！

「聖地が！？」

「なんて事を！」

誰かの悲鳴混じりの声を聞きながら、私は神官次長だけをまっすぐに見つめました。

「デールイ神官次長様。私は、黒のリーフェリアを辞退致します」

「貴方はすでに神の伴侶となられている」

周囲の混乱をよそに、神官次長はチラリと床に視線を向けただけで落ち着いています。

やっぱり、強力洗剤だけでは駄目なのでしょうか？

神官次長のすぐ側に立つ天敵に一瞬視線を向けると、こんな状況にも関わらず、相変わらずの微笑みを浮かべています。

その目が、これで終わりですか？ と小馬鹿にしています。思わ

ずムカツ、と腹が立って、ぐ、とお腹に力を込めました。

やってやろうじゃありませんか！

こうなったら、徹底的に巻き込んでやりますよ！

「ええ。ですから、その神の伴侶を辞退すると申し上げたんです。私は、」

反対の手で握り締めていたもうひとつの瓶を、大きく振りかぶり。

「神様と離縁します！」

強力洗剤で模様が消えた床で瓶が割れて。

液体が混じり合った途端、爆発がおきました。

その爆風に吹き飛ばされる直前、天敵の微笑みではない笑顔をみた様な、気がしました。

ああ、それにしても。

お母さん。

・・・あなた、なんて物を開発しているんですか。

主婦の仮面を被った母の笑顔を思い出しながら、地面に叩きつけられる覚悟をしていたのですが。

背中に伝わった軽い衝撃とともに、太い腕が私をしっかりと抱きとめて。

目を開けると、黒のフードの奥で、焦げ茶色の瞳が、輝いていて。

え？

まさか。

・ ・ ・ だんな、
さま？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1908x/>

離縁します！

2011年11月13日13時12分発行